

アルビダ姐さんはチャ  
ホヤされたい！

うきちか越人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

太る前のアルビダは美少女だった!!

周りからチャホヤされる快感にドハマリしました。海賊になって世界中からチャホヤされたいです。

幼年期のアルビダに憑依した元男がチャホヤされるために頑張るそうです。  
(アルビダに恋愛フラグは立たないです)。

# 目次

プロローグ	1
八年間と船出日和	7
オレンジと白ばっか	16
無人島とラスボス候補	28
四皇のお頭と新米の姐さん	39
姐さんの意地と赤髪之力	51
療養期間と一年間	73
断崖の孤島と海のコックたち	85
海軍スルーとスベスベ	104



# プロローグ

拝啓、前世のパパンママン。

出来の悪かったバカ息子はどうかやら転生したようです。

美少女にな!!

いつも通り寝て、朝ベッドから起きたら体が縮んでいたのだ。部屋の内装も丸つきり変わってて思わず「知らない天井だ」と呟いてしまった。

夢でも見ているのかと思い、手近にあった姿見で容姿を確認してみたところ、んまーとてもふつくしい幼女が映っていたのだ!

少しウェーブの掛かった艶やかな黒髪。汚れの知らぬ柔肌。気の強そうな眼はややつり上がっていて、スラツと通った鼻筋と綺麗な唇といった各パーツはまるで黄金比のように整っていた。

んんー?

なあーんかこの顔どっかで見たことあるんだよなー。

親戚の綺麗な叔母さんの子供時代の写真を見せられているような。

多分俺はこの顔を知っている。でも思い出せない。

でもまあ夢だし良いか！ って結論が自分の中で出たので家の外などを探索した結果。

アルビダの幼年期であることが発覚したのだ！

”アルビダ”

大人気海賊漫画ONE PIECEに出てくる、そばかすと肥満体型が特徴の女海賊だ。俺の記憶が正しければ主人公モンキー・D・ルフィが故郷フーシャ村を出て初めて戦う海賊だったはず。

海兵を目指すコビーと言う少年が間違えて乗ってしまったアルビダの船で雑用係をしている所を、何やかんやあってルフィが助けるのだ。

ルフィにぶつ飛ばされた後、海の秘宝である悪魔の実の一つ”スベスベの実”を食べたことで超絶美人へ転身。”道化のバギー”と組んでちよくちよく出てくるキャラだ。

なるほど。この顔に既視感があった訳だ。スベスベの実を食べた後のアルビダを幼くしたらイメージとピッタリ合った。

ああ、何でここがONE PIECEの世界だと気付いたのかと言うと”東の海”<sup>イーストブルー</sup>がどうのこうの話している人がいたり、ちらほら覚えのある海賊や海兵の名前が出てきたからだ。

ロジャーとかガープとか、ロジャーとかガープとか……ロジャーとかガープとか!!  
もういいよ! 海賊王と伝説の海兵。そういえばどつちも東の海出身でしたね!!  
その話ばかりだから聞いてみたところ、この島が東の海<sup>イーストブルー</sup>ってこともわかった。

まあそれはさて置いて、家の外に出てみれば道行く人々に「アルビダちゃん可愛いねー」とか「アルビダちゃん天使みたいだよ」なんて声を次々掛けられる。

買い物をしたわけではないのに、サービスと言つて食べ物をストックされる青果屋や魚屋や肉屋。

同年代の男の子なんかは俺を見ただけで顔を赤らめ、女の子ですらも感嘆のため息を吐いている。

娘がいるにも関わらず「アルビダちゃんみたいな娘が欲しかった」と町長は宣い、「十年後まで待つから、その時になったら結婚してくれ!」と三十過ぎのロリコンおっさんがプロポーズしてきて町の人たちに袋叩きにあつたり。

うんー

ーめつちや気持ちいいイイイッ!!!

なんだこれは……なんだこれは!?

まだ幼いにも関わらず驚異的な美貌で周りからチャホヤされる特別感!

異性は当然のことながら、同性ですら魅了してしまう優越感!

気持ちいい! 気持ち良すぎるぞっ!!

なるほど、原作のアルビダの気持ちがわかる。わかってしまう。

そばかすデブの癖に自分のことを美しいか船員クルーに一々問い質していたが、幼年期にこれだけチャホヤされていたのならしょうがない。

だつてコレ気持ち良すぎるもの!!

自分は特別、なにしても許される。後の”海賊女帝ボア・ハンコック”に通ずるところがある。

どれだけ肥え太ろうがおかしいのは周りの価値観であつて、自分の美しさは一切損なわれない。そんなところだろう。

原作でもスベスベの實の副次効果で痩せた後も「変わったのはそばかすが消えたくらい」と言っていたいな。

それにしてもチャヤホヤされるのがこんなにも気持ちいいものだとは思わなかった。

前世では到底得られなかった優越感はまるで麻薬のように強烈な幸福感と中毒性がある。

コレをこれからも味わい続けたい。この町の住人のみならず、世界中からチャヤホヤされたい！

ー海賊だ……海賊になろう。

賞金首になれば手配書が世界中に散りばめられる。世界中を俺の虜にしてチャヤホヤされるんだ！

動機が不純？ ふざけてる？

関係ないね。コレを知ってしまったら関係ないんだよ。

海賊は自由だ。海賊なら「ひとつなぎの大秘宝」を指さなくてはいけないと誰が決めた？

何を指そうと自由だからこそ海賊になる。

頭がおかしいと思われようが、俺にとってチャヤホヤされることは命を賭けるに値するんだ。

だから俺……いやアタシは——

「世界一のかまっちゃんに、アタシはなるっ!!」

## 八年間と船出日和

八年後。

絶世の美少女アルビダちゃんは傾国の美少女アルビダさんへ。

十五歳になったアタシはそれはもうとんでもないことになっていたので！

透き通るような純白の肌と抜群のボディラインを惜し気もなく露出し人目をこれでもかと集める。

あれだ、スベスベの実を食べた後の格好に酷似しているのだ。と言うかそれを参考にしたのだけれど。

白ビキニにタイトなズボン。丈の短いジャケットを前開きにして袖を通して。帽子は何か違うと思いつけていない。

顔もやや幼さを残しながらも大人の階段を登っているような、危うさが見え隠れしながらも周りを魅了して止まない、正しく神の造形!!（自画自賛）

嗚呼……完璧だ。美しい……。

この世にアタシ以上に美しい存在があるだろうか？ いやない！（反語）

と、まあどうしてこうなったのかと言えば……

めっちゃ修行した。

端的に言えばそうなる。

別にアタシの目標のみに焦点を当てれば強くなる必要はない。だってチャホヤされたいだけだから。

でもその目標へ達する手段として海賊を選んだわけで。どう足掻いても戦闘つてのは避けて通れない道だ。

美少女から美少女になって美女へ。

原作のアルビダのように肥え太るのは勘弁願いたい。何もしなくてもアタシが美しいのは当然の事だが、原作の太った姿が醜いと感じる美意識はある。

まあつまり強くなるための修行でたくさんエネルギーを消費して、よく食べよく寝て、健康的なプロポーションを維持する。

まさに一石二鳥!! 修行にも気合いが入るってもんだ。

修行の内容としては、取り敢えず原作知識を利用して思い付くものを全部試してみ  
た。

まずは海軍特有の体技である”六式”。”ソル剃””シガン指銃””ゲッポウ月歩””テツカイ鉄塊””ランキヤク嵐脚””カミエ紙絵”か  
らなるそれらを会得しようとした。

全部は無理でした。難しすぎるって！

会得出来たのは剃ソルと月歩ゲツポウの二つだけ。嵐脚ランキヤクは惜しいところまで行つたのだが、今のま  
までは風圧を飛ばしているだけに過ぎなかった。

指銃シガンはアタシの可憐な細指に傷が付きそうだったので一回試して諦めた。鉄塊テツカイもほ  
ぼ同じ理由だ。紙絵カミエは原理がわからん。つぽい動きは出来るけど果たしてコレは紙絵  
と呼べるのだろうか？

次は“覇気”。

コレはかなり重要だ。会得していないと悪魔の实の分類で“自然系ロギア”の能力者が出  
てきた瞬間詰む。超ピンポイントな弱点を突かない限り、こちらの攻撃は全部受け流さ  
れるからな。

覇気を纏えば自然系ロギアの実態を捉えることが出来る。”超人系パラミシア”の中にも打撃が効か  
なかつたり特殊な能力を持った相手でもダメージを与えることが出来る。

東イーストブルーの海で満足するならともかく、偉大なる航路グランドラインを目指すなら必須技能と言えるだろ  
う。

原作で出てきた言葉を借りるなら『覇気とは誰にでも備わっている』、『疑われないこ  
と』。これが重要らしい。

最初の半年近くは全くと言っていいほど形にならなかった。挫けそうになったが『疑

わなないこと』が肝要で、『誰にでも備わっている』のならアタシも出来ないはずがないと言いついて必死こいて頑張った。

原作でルフィは二年である程度ものにしていたが、その域まで行くのには倍の四年掛かった。

四年でわかったことは”見聞色の覇氣”よりも”武装色の覇氣”の方が得意であるようだ。

因みに生まれついての才能がものを言う”霸王色の覇氣”はアタシには備わっていません。まあ当然と言えば当然だと思ふ。

言っちゃなんだが原作のアルビダは小物であつたし、前世なの魂かも元々は凡百の存在だつたのだから。

まあ無いものねだりしていてもしょうがないのでこれまで以上に鍛練に精を出した。

適正のあつた武装色は相当なものになつたと自負している。”鉄壁のパール（笑）”さんの鎧（？）が濡れティッシュに思えるほどに磨きあげた。

ただ残念なことに見聞色の方は八年掛かつて漸くルフィの足元が見えてきたレベルにしかならなかつた。

ああそれと。まだ旗揚げしていないが、この八年でアルビダ海賊団（仮）に初めての船員クルーが誕生した。

同い年のボガードくん。当然の如くアタシにホの字だった彼は気付けば一緒に鍛練する仲になった。

三年前、つまり十二歳になつてから鍛練を始めたボガードくん。アタシには全く及ばないけれど、可愛らしい見た目だったので最初は女の子かと思つていたが、男の娘だった。

マジか、と思つたのもつかの間——具体的には三ヶ月くらい——いつの間にか筋骨隆々の偉丈夫へと変貌を遂げていたのだ!!

一言で言えば”金髪のフランケンシュタインの怪物”。威圧感が凄い。

取り敢えず副船長に任命してやった。嬉しそうにしていたがちよつと怖い。

見た目こそ強そうだが修行期間が三年と短い分、覇気も六式も未だ中途半端な出来だ。最弱の海、東の海イーストブルーでは十分過ぎるほどではあるが。

とまあ長々と振り返つてみたわけだが、そろそろ海に出ようかと思つている。細かい理由を挙げれば色々出てくるが、一番の理由はズバリ”スペースの実”だ。

原作を思い返してみると、アルビダがルフィにやられた後、アルビダは美女に転身して”始まりの街ローグタウン”で再会する。

その間にスベスベの実を食べたことになるのだが、この二つの出来事は両方とも東の海イーストブルーでの出来事なのだ。

この期間中、長くても一月程の間に偉大なる航路グランドラインへ行って戻ってをしたとは思えない。

かと言って北の海ノースブルー、南の海サウスブルー、西の海ウエストブルーに行くのには凧カームベルトの帯などを越えなくてはならず、これも考え難い。

つまりだ、これらを踏まえるとほぼ確実にスベスベの実イーストブルーは東の海に存在したと言うことになる。

まあこの時期に偶々他の海から持ち込まれたものかもしれないが、元々東の海イーストブルーに在った可能性だつて十二分にある。

それ以外で原作中に所在が明らかにされた悪魔の実は非常に少ない。

ウシウシの実モデルジラフ、アワアワの実、メラメラの実くらいじゃないか？

何にしても、何れも競争相手が悪すぎる。前二つは世界政府の諜報機関でメラメラの実イーストブルーは競争相手もそうだが、”ポートガス・D・エース”が死んだ事で実の状態で手に入ったんだよな。

何れにせよ一番可能性があるのがスベスベの実つてわけだ。

因みに妥協してスベスベの実を求めている訳じゃない。スベスベの実が良いんだ!!

だって超絶美肌になれるんだぞ!!

スキンケア要らずになるなんて素晴らしいじゃないか!!

この八年間、粉雪のようにきめ細やかな美肌を維持するのがどれだけ大変だったか

.....

それに海に出ると言うことはこれまで以上に日差しに晒されると言うこと。ケアもそれに比例して大変さを増していく。

それらから解放される。こんなに嬉しいことはない!!

そしてスキンケアに使っていた時間を他のことに充てられる。結果もつと美しくなつてもつとチャホヤされる正のスパイラル!!

.....勝つたな。

何が勝つたかはわからないが、とにかくアタシの心は期待感に満たされていた。

小さな港にはアタシの美貌をフルに活かして貢がせた小舟。バスキッチン付きで二〇三人の船旅に適した中々良い船だ。

海賊旗に描かれたシンボルであるドクロ。背景にはピンクのハートに矢が突き刺さったもの。そして尾先がハートマークになった小悪魔の尻尾。

アタシの美しさでハートを撃ち抜くよって意味合いを込めてそれにした。ハンコックの技に似たようなのがあるって？

知らんなあ〜。

とにかく！

ここからアタシの『世界中の人からチャホヤされたい計画』の第一歩が切られるわけだ。

「ボガード、準備は良いかい？」

「へい、姐さん！」

「この海で最も尊いのは？」

「姐さんです！」

「じゃあこの海で最も価値があるのは？」

「姐さんです！」

「当然さ！ じゃあ最後に、この海で最も美しいのは!？」

「この世の総てと比べても、ぶっちぎりで姐さんです!!」

「アハハハ!! わかってるじゃあないか！ 行くよボガード、世界がアタシの美しさを待っている!!」

「ハイッ!!」

天気は快晴、波も穏やか。絶好の船出日和に高笑いを上げ旅立った。

しかし気付かない。原作で出てきたアルビダの年齢など気にしたことがなかったか

ら。

今が原作の始まるーモンキー・D・ルフィが船出を迎えるーまでどのくらい時間が遡っているのかを。

気が付いていけば間違いなく後一年は船出を遅らせていただろう。

気付かない。東の海イーストブルーに今誰が要るのかを。

「アハハハハ!! 水面に映るアタシも美しすぎる!! そうは思わないかいボガード?」

「ヘイ! その通りでさあ!!」

「アハハハハ!! アハハハハ!!」

「ヘツヘツヘツヘツヘツ!!」

## オレンジと白ばっか

「へえ、やるじゃないかいボガード。あんた航海士としての才能が有ったなんてねえ」

「へい、姐さんが海に出るってんで勉強しやした！」

盲点だったと言うか、作中の殆どが偉大なる航路グランドラインでの出来事だったため海を舐めた。

荒れ狂う波とか異常気象とか、通常のコンパスが役に立たないのが偉大なる航路グランドライン。

なら東の海イーストブルーとかぬるゲーだろと勘違いしていた過去のアタシを殴りたいね。

海は厳しいと言うのを出航してすぐに身を以て教えられた。故郷の島が見えなくなつて程なくして遭難したのだ。

まあ極短い間だけ現在地がわからなくなつただけなので、遭難と言えるほど大袈裟なものではないかもしれないけれど。

そこで役に立ったのが我がアルビダ海賊団の記念すべき一人目の船員クルーにして副船長のボガードくんだ。

アタシの役に立つべく、必死こいて勉強したらしい。おかげさまで順調に進めていく。(らしい)

視界は一面海で島影すら見えないので、次の島に着かないとわからないがな!!  
まあこの件でアタシに航海術が備わっていなかった事がわかっただけでも儲けもの  
だろう。

徐々に日が暮れ始め、空が茜色に染まった頃になって漸く島影が見えた。このペース  
なら完全に日が落ちる前に島に着くだろう。

無人島ならそれで良いのだが、問題は有人島だった場合。海賊旗ジョリーロジャを掲げているので  
海賊であることは一発でバレる。

その時の島民のリアクションとして反抗、降伏、通報などが考えられる。薄いところ  
で歓迎つてところか。

それに最悪あの島に海軍基地があるかもしれない。

まあだからと言って海賊旗ジョリーロジャを隠すつもりはないけれど。

バカみたいな想いだが、アタシはこの旗に『世界中の人からチャヤホヤされたい』と誓つ  
た。だから海賊になった。

この旗を下ろすと言うことはその想いすら取り下げることにはならない。

それは絶対にダメだ。やってはならない。

「このまま他の島を探してたら夜になっちまう。あの島に行くよボガード」

「ハイ、姐さん」

「とは言え、面倒事を避けられるならそれに越したことはない。アタシが一足先に様子を見に行く。アンタはこのまま船を向かわせな」

「ハイー!」

船から飛び出す。六式月歩<sup>ゲツポウ</sup>は宙を蹴つての空中移動を可能にする体技。

そのまま空を駆け目的の島へと向かった。

「な、何じゃあ!?!」

着いたのは小さな港町。そこにいた人々がアタシを見てザワザワしている。空中散歩していた人間が現れたらそうなるか。

と言うかおじさん率高いな。側頭部と後頭部にだけ白髪の生えた白い髭のおじさん……もしくはお爺さん。

ニット帽をかぶった、これまた白髪で白いあご髭を生やしたお爺さんとその傍らに白い犬。

そして眼鏡を掛けたまたしても白髪のお爺さん。この人の髪型すごいな。てっぺんとサイドに三つのお団子がある、サザ○さんヘアと言うか……白い犬を見た後だとブードルに見えると言うか……

……ん? ブードル?

……あつ!!　もしかしてここオレンジの街じゃないか!?  
聞いてみよう!!

「悪いねえ、驚かせちゃまって。ところでここはオレンジの街であつてるかい?」

「あ、ああその通りじゃ。ここはワシらが三十年掛けて作り上げた街、オレンジの街であつてるぞい」

胸を張つて答えるプードルみたいな髪型のお爺さん。まあプードルみたいなと言うか——

「そしてワシがこの街の長さながら、町長のプードルじゃ。よろしくのう美人さん」

「美人さん……それはアタシのことかい?」

「当然じゃ!　アンタみたいな美人さながら、生まれてこの方初めて見たわい!　のう、お前ら!」

「「オオオオオオオツ!!」」

ああああ!!

これこれえええーっ!

皆してアタシを見て目にハートマークを浮かべて熱を上げる。

これが気持ちいいっ!!　これが欲しくて海に出たんだ!!

故郷の島じゃあ呼吸をするようにアタシを褒め称えてくれた。けれどやつぱりマン

ネリと言うか、まだアタシの美しさを知らない人たちに知らしめる。

そして惜しみ無い称賛を浴びる！ たまらない！！

「そう！ もっと褒め称えなさい！！」

「オオオオオオツ！！」

「この海で最も尊いのは？」

「「「貴女ですっ！」」」

「この海で最も価値があるのは？」

「「「もちろん貴女ですっ！」」」

「その通り！！ ではこの海で最も美しいのはっ!?」

「「「当然の如く貴女様でええすっ!!」」」

はあああ……………エクスタシー（恍惚）

この後、この掛け合いを五回程繰り返し返して満足したアタシは本題に入る。

わ、忘れていたわけじゃあないぞ！

気持ち良すぎて調子に乗っていたけれど忘れていたわけじゃあない！

「さて、アタシの美しさを再確認したところで…………町長」

「なんじゃ？」

「もしアタシが海賊だつて言ったら、アンタはどうするんだい？」

「なっ?! か、海賊じゃと?!」

プードルさんのその一言で辺りは一瞬で静寂に包まれた。

そこにアタシの並外れた美貌で放たれる冷たい笑み。

うん、すごく様になってるんだろうけれど確認できないのが辛い。絶対に超絶クルビューティーな感じだろう。今度から練習しよう。

「そう、海賊さ。まだ旗揚げ間もないけれど歴とした海賊だよ」

「も、目的はなんじゃ?! ワシはこの街の長さながら! 悪党には屈しないぞ!」

「お、おれたちもだ!」

「おれたちの街はおれたちの力で護るんだ!!」

オレンジの街の人たちは恐怖を孕んだ眼でこちらをみる。

自己を奮い立たせているが、見聞色の覇気で調べると恐怖の感情がありありと伝わってくる。

うーん……なんか違うな。

注目を浴びるって意味ではチャホヤされるのと変わりないけれど、コレは全然気持ち良くない。

アタシの求めるモノはコレじゃあないんだね。

「アハ、アハハハ!!」

「くっ、やる気かつ!？」

「アハハハハ……はあー笑った。すまないねえ町長。怖がらせちゃった」

「な、何じや……冗談じやつたのか……」

「いいや、冗談じやあないよ。アタシは紛れもない海賊さ」

「な!?! やはりー」

「まあ結論を焦るんじやあないよ。アタシは海賊さ。だから欲しいものは奪い取るのさ。なら、アタシの欲しいものは何だと思う?」

「か、金か?」

まあ普通はそう思うだろう。一般的な海賊のイメージに違わない。

でもアタシはそうじやあない。そりやあこれから海賊やつてりやあ金銀財宝を求めるところもあるだろう。

場合によっちゃあ略奪だつてするかもしれない。

でも、本当に欲しいものは違う。

「アタシはね、チャホヤされたいのさ。世界中の誰よりも」

「……………は?」

ポカンとした表情。本当に犬に見えるぞプードルさん。

「チャホヤされたい。美しいと言われたい。誉められたい。尊ばれたい。誰よりも、世

界中の誰よりもチャホヤされ、世界中の人々にかまってほしい!! それがアタシの求めるものさ」

「な、何じゃあそれは……」

最大限の称賛

「だからアンタたちはアタシに”宝”を差し出せば良いのさ。わかつたかい?」

「ぶつ……ぶははははは!! お前さん本当に海賊か!? ああ、ああ、構わんわい!!

お前さんが気の済むまで貢いでやるわい!」  
チャホヤして

一氣に場が明るくなる。そして次々と送られる称賛の言葉。

おべつかじゃあない。当然だ。だってアタシの美しさの前では薄っぺらい嘘なんか吐けるわけないのだから。

その後ボガードくんが乗った船が着港したが騒ぎになることはなかった。訂正、怪物みたいなボガードくんを見てマダムたちが若干悲鳴を上げてた。

完全に日が落ちてからは酒場に案内され宴となった。故郷の島で貢がせた金ペリは少ないが、無思慮に使ってはいはすぐに底をつくだろう。

と言うことで、「町長の男気見てみたい」的なニューアンスでブードルさんに問いかけてみたところ、「ワシの奢りじゃあー」と奮発してタダ飯タダ酒にありつけた。

改めてアタシの美貌と言う魔力に自分で酔いしれたよ。

オレンジの街への滞在は三日。

その間白い犬ーシユシユーの飼い主さんがペットフードショップをオープンした。

アタシは美貌を活かして客引きをしたのだが予想以上に客が集まり店主は嬉しい悲鳴を上げていた。

食料品店ではちよつと色目を使ってやれば簡単にサービスしてくれる。こちらとしてはかなり安く大量の食料を購入できて嬉しいのだが、店側からしたら大赤字だろう。泣きそうになってかわいそうだったので、ほんのちよつとだけサービスしてあげた。食料品店の店長さんは顔を真っ赤にしながらも満面の笑みを浮かべていた。涙は止めどなく流れ出ていたけれど。

他にも色々あったけれど語り尽くせない。すごく濃い三日間だったことは確かだ。とても充実した滞在だった。

「じゃあアタシたちはそろそろ出る」

「うむ、またいつでも来て良いぞ。アルビダちゃんたちみたいなの海賊なら大歓迎じゃわい」

「へえ、そうかい……まあ今のご時世、アンタたちが想像するような矜持を持たない海賊が多いからね。気を付けなよ」

「それを言うたら、アルビダちゃんは海軍に気を付けるんじゃないぞ」

「当然だね」

あ、そうだ。とても充実した時間を送らせてもらったお礼に少し”ヒント”を出してみよう。

「ああそれと、海賊に善い悪いなんてちゃんちゃら可笑しいけれど、それでも”気持ちの良い海賊” っているのはいるもんだ。アンタらがピンチになった時、もしかしたら海軍じゃなくて” そういう奴ら” が助けになるかもね」

「? どういう意味じゃ?」

「その時が来るかは定かじゃあないけれど、覚えておいて損はないよ。……さて、海賊の出航するのはサツパリしたのが良い。行くよボガード!」

「へい、姐さん」

オレンジの街からアタシたちの小舟が離れて行く。

町民たちは思い思いの言葉を投げ掛け、手を振り続ける。

しみつぽくならないように、振り返らずに軽く手を挙げ別れの挨拶に。

まあペットフードショップの店主が存命だったと言うことはまだ”道化のバギー”は現れていないということ。

バギーが現れてからはオレンジの街にとって辛い日々になるだろうが、主人公たるル

ファイが何とかするだろう。一応ヒントになるかわからないが助言も出しといたし。

アタシにはアタシのやるべきことがある。

直近にして絶対の目標はスベスベの実を見つけること。

これがないと話にならない……くはないけれど、是非とも欲しい。

このままでも究極的な美貌を誇っているけれど、スベスベの実が手に入ったならば、もう鬼に金棒状態になるだろう。

あ、鬼に金棒で思い出したけれど原作では“金棒のアルビダ”って呼ばれてたな。

……まあ良いか。むしろ要らないか。

超絶<sup>アタシ</sup>美女が武骨な金棒を手をしているのは、絵面的には映えるのかもしれないけれど、アタシ自身の美意識的にはナシだ。

と、考えに耽っているアタシの顔がチラリと水面に映される。

「ねえボガード」

「なんでしよう姐さん？」

「アタシってどんな表情しても美しくなるんだねえ」

「勿論でさあ！ いついかなる時も美しなってしまうのが姐さんです！」

「ほう、それは良い言葉だねえ！ つまりエンドレス美人！ 無限の美女アルビダ様と

「はアタシっ!!」

「よっ! 永久不滅の美女アルビダ姐さん!!」

「アハハハ!! アハハハ!!」

「ヘッヘッヘッヘッヘッ!!」

## 無人島とラスボス候補

オレンジの街を出航して二日。次の島が見えてきた。

先日と同じように月歩ゲッポウでアタシが先行して島に入る。どうやら今回は無人島のようなだ。

「いいかいボガード、渦巻き模様の果実を見つけたら報告するんだよ」  
「へい、姐さん」

まだ故郷の島を出て二つ目の島。気が早いかも知れないが、いつ悪魔の実を見つけても良いようにボガードくんには言い含めておく。

オレンジの街でも聞き込み調査は行っていたのだが成果はなかった。まあ海の秘宝とまで呼ばれているのだから早々に見つかるとは思っていないが。

それに原作にもあるように偉大グランドなる航路ドラインの外の海では、そもそも悪魔の実の存在すら知られていないことが多々ある。

知っていても所詮まやかしだろうと切つて捨てる人だつて多数いる。

ボガードくんは前者で、初めてその事について話した時には頭にクエスチョンマークを浮かべていたくらいだ。

まあ見つけたとしてもそれがアタシの目的のスベスベの実かはわからない。悪魔の実凶鑑がなければ形すらわからないのだ。

原作開始前のこの時期に東の海イーストブルーにある可能性は高いと思うので、根気よく探していくしかないだろう。

うーん、ところで今って原作開始の何年くらい前なんだろう。

ボガードくんと手分けして探してみたが、やはりと言うべきか成果はゼロ。でもまだ二人合わせてこの島の五分の一くらいしか探索出来てないと思う。

木々が生い茂って羽虫なんかもたくさんいたのでうっとおしかった。草木で肌を切ったり虫に噛まれなかったか？

武装色の覇気で万事解決!!

羽虫ごときが鉄を傷付けるなんて出来やしないだろう？

まあ万が一アタシの世界一美しい肌に傷でも付けようもんなら、この島が何も無い更

地になるかもねえ。

ともあれ今日の探索は終わり。船の近くの広い砂浜をキャンプ地にして晩飯を食べる。

そこでなんと副船長兼航海士（暫定）のボガードくんの有能さがまた明らかに！

めっちゃ美味い！　今まで……と言うか二日三日程だけれど料理はアタシが担当していた。

ただ今回は野外料理にしようと言うことでボガードくんにやらせてみたのだ。

するとどうだろう。最低限とは言え、各種設備が整った船のキッチンで作ったアタシの料理と手早に作ったボガードくんの野外料理。

軍配はボガードくんに挙がった。聞けば料理屋の一人息子だったらしい。

ぐぬぬ……航海術でもボガードくんに負け、料理の腕でも負けるとは……

く、悔しくなんかないぞ。一人で海に出たら遭難するかもしれないし、料理も焼き以外の調理法は諦めているけれど、それを補ってもまだ余りある程アタシは美しい……

そうだ！　アタシは美しいんだ！！

海で迷子になる？　料理が下手？

ノンノン。それがどうした！！

アタシの美貌の前では、それらは欠点足り得ないっ!!

「そう! アタシはこの海で一番美味しいのさっ!!」

「その通りでさあ!!」

「アハハハ!! アハハハ!!」

「ヘッヘッヘッヘッヘッ!!」

この後めちやくちや寝た。

探索二日目。

元気澆刺! 気分爽快!

「おい、ボガード。さっさと起きな!」

「ハイ! すいやせん姐さん!!」

終日探し回ったがこれと言った収穫はなかった。

まあそれは悪魔の関してで、食べられそうな果物なんかはかなりの数見つかった。  
た。

これまたボガードくんが有能さを発揮して食べられるものとそうでないものを分け

ていった。

植物に関する知識も島を出る前に叩き込んだらしい。

いやあ、ボガードくんの肩書きの増加がとまりませんなあ（白目）

副船長、航海士、料理人、植物学者↑NEW

彼はどこを目指しているのだろうか。いやまあ有能な部下つてのはありがたいけれどね。

今日の食事もボガードくん任せ。

うん美味しい。そう微笑みながら言つてやれば、ボガードくんは鼻血を吹き出しながら幸せそうな顔で気絶した。

ああ、鼻血で思い出したが、この島には小さな滝があった。

そこで水浴びをして汗などを洗い流しているのだが、ボガードくんが覗くとは思えない。

忠誠云々の話ではなくて、故郷の島でアタシの美しさに耐えられなくなった男共がアタシの入浴を覗いたことがあるのだ。

確かにアタシの究極の美ボディを前に覗きをしようと思うのはしようがない。自然の摂理だ。

ただ浴室の周囲には大量の鼻血を吹き出して倒れている男共が転がっていた。

辺りは血だらけ、これがほんとのブラッドバスか。なんて当時は思っていた。

これが島の男の教訓となり、誰もアタシの風呂を覗こうとはしなくなった。

ちなみに見られて恥ずかしくなかったか聞かれたこともある。

『逆に聞くがこのアタシの体に恥ずかしい箇所なんてあると思うかい？』とドヤ顔で聞き返してやった。

三日目、四日目。

変わらず成果なし。わかってちやあいたけどしんどい。

ちよつと不機嫌になったアタシをボガードくんが必死で宥めてくれた。

相変わらずメシが美味い。

さて、五日目だ。

恐らく今日でこの島の探索は終了するだろう。

余りの成果のなさに若干気落ちしていたが、ボガードくんが励ましてくれたお陰で持ち直した。

そうだよ。そう簡単には見つからないって最初からわかっていたじゃあないか。

淀んだ表情はアタシには似合わない。美意識からもズレている。

それにまだたつた二人の海賊団とは言え、アタシは船長だからね。

船員クルーの命を預かる身としてはいつでも自信たっぷり引張って行かなくてはいけない。

「海の秘宝……この島にはなくても見つけるまで探し続ける。いいね？」

「ハイ、姐さん」

「よし！ 行くよボガード！」

「ヘイ！」

とまあ気分を一新してみたものの、結局この島では悪魔の実は見つからなかった。

途中ボガードくんと合流して船の停まっている砂浜へと帰る。

まだ日は高いところにある。戻ってそのまま出航するか、それとももう一泊するか。

歩きながらボガードくんと相談する。

「アンタはどう思うんだい？」

「ハイ、あつしはもう一泊することを薦めますぜ。最寄りの島まで距離が遠い。夜の航

海になる可能性が高いですぜ姐さん」

「そうかい。ならそうしようかねえ。もう一食アンタの野外料理を食えるってんなら、

それはそれで趣が————っ!?」

瞠目。

慌ててボガードくんの手を引つ張り茂みに飛び込む。

……ヤバイ。いやヤバイなんてもんじゃあない。

見聞色の覇気に引つ掛かった馬鹿げた生命反応。

複数の人間だ。けれどそこらの海王類すら凌ぐ圧倒的な強者の気配。

こんなの本来東の海イーストブルーにいて良いはずがない!!

背筋が凍る。肌が粟立つ。呼吸も荒くなる。

まだ見聞色の覇気を会得していないボガードくんは何のことかわかっていないみたいだが、アタシの様子を見てただ事ではないと感じたようだ。

「……良いかいボガード、決して音を発てるな。出来るかわからないけれど、なるべく気配を消すんだ。呼吸も最小限に留めな」

「ハイ」

小声で指示を出す。

しかしまあ、こんな規格外の気配を持った人間相手なんだ。

この程度子供騙しにもなりやあしない。

だってほら————

「その茂みに隠れている二人。出てきな、悪いようにはしねえ」

見聞色の覇気を使えないはずがないのだから。

隠れるのは無意味。ならば逃走か？

無理だ。間違いなく格上。アタシらが下で相手が圧倒的に上。

逃走の”と”の字すら叶わず捕まる、もしくは殺られるだろうな。

「しょうがない……覚悟決めるよボガード」

「へい」

ゆっくりと身を隠していた茂みから立ち上がる。

改めて見聞色で辺りを確認したところ、既に囲まれているようだ。

四面楚歌ってやつだ。もしくは絶体絶命。

冷や汗が流れる顔をふと見上げた。

絶句という言葉があるが、正しくアタシはそれを経験した。

「うおっ!! とんでもない美女だぜ、お頭!」

丸々太った男。サングラスと骨付き肉が目についた。

「いやーたまげた。おれの息子の嫁さんにでも……つてちよい歳が離れてるか?」

パーマが掛かった黒髪の男。その額に着けているバンダナには『YASSO』という文字。

「マジかよ、東の海だぞ……お頭、こつちの少女恐らく使える」

煙草をくわえ、長銃を携えた黒髪オールバックの鋭い目付きの男。

そして——

「みたいだな、驚いたぜ。嬢ちゃんの表情見りや必要ねえかもしれねえが、一応名乗っておこうか」

赤い髪、麦わら帽子、左目に走る三本の傷跡。

見間違えるわけがない。

この時期にそう呼ばれていたかは知らないが、彼は後の海の皇帝、”四皇”の一角。ONE PIECEと言う物語のキーパーソンにして、主人公モンキー・D・ルフィに多大な影響を与えた大海賊。

その名は——

「おれはシャックス。 ” 赤髪のシャックス ” だ」

## 四皇のお頭と新米の姐さん

「おれはシャンクス。」赤髪のシャンクスだ」

「……そうかい。アタシはアルビダ、今はまだただのアルビダだよ」

精一杯の強がりです笑いながらそう返してやる。

ああクソ、とんでもないな。覇気を使わずこの威圧感か。

それにしてもシャンクスか。今が大体原作開始の約十年前前つてのはわかった。

わかったが、この状況をどうにかしないとわかったところで意味がない。

原作では他人をからかうのが好きで、頭から酒を掛けられても笑いとばして、友達が

やられてるのを見て怒る。

そんな気のいい快男児として描かれていた。

それだけを考えるならアタシたちがなにもしなきやあ見逃してくれるだろう。

だからって絶対に敵じゃあない保証はどこにある？

ルフィはまだ村の少年であつたし、周りの村民たちも皆一般人だつた。

だがアタシは海賊だ。砂浜に停めた船の海賊ジョリーロジャー旗も見られているだろう。

さて、どうするべきか。

「それにしても驚きだねえ。アンタみたいな大物がこんな田舎の海にいるなんてさ」

「おれだって驚いてるんだ。イーストブルー東の海でこんな可愛らしい覇氣使いに出会うとは思わな

かったよ、嬢ちゃん」

「可愛らしいとは光栄だねえ。それと覇氣使いつて何のことだい？」

「惚けなくて良い。見りゃわかる」

チツ、流石に誤魔化せないか。

「はあ……まあアンタの言う通りさ。んで、大海賊“赤髪”がこんな辺鄙な無人島に何の用だい？ 言つとくけれど宝箱の一つもありゃあしないよ。精々果物がたくさん成ってるだけさ」

「ああーそうか。まあ用つて程でもねえさ。強いて言えばこの辺りの海域を探索してるんだ。そう言う嬢ちゃんこそ何かこの島に用でもあつたのか？」

「アタシも同じさ。ただの探索。まあ目当てのものは見つからなかったけれどね」

「ああ………ははーん、成る程なあ」

「っ！ なんだいジロジロ見て……アタシに惚れたかい？」

「バカ言え。嬢ちゃんの歳じゃ十年早えよ」

ぐっ……アタシの魅力が通じないなんて。

冷や汗タラタラなこの状況の緊張感を吹き飛ばす程の衝撃だ。

これが四皇か……つてそれは流石に失礼か。

ああ、まあ良い。逆に冷静になれた。

冷えた頭でもう一度状況を確認してみれば、”赤髪海賊団”の面々に戦意がないのが感じ取れる。

なんだ、完全に一人相撲だったって訳か。

「なら十年後にアンタのその余裕を崩してやるよ。アタシの進化を続けるこの美貌でね！」

「だはははは!! まあ嬢ちゃんが将来別嬪になるのは間違いねえな！ ただ、おれはそんなに甘い男じゃねえぜ？」

「ふん、十年後吠え面かいても知らないよ」

うん、調子出てきた。

周りから見れば自信過剰に聞こえてもアタシやアタシの美貌にやられた者からすれば自信適正と言ったところか。

重要なことだ。アタシにとつては。

「それよりも嬢ちゃん」

「なんだい？」

「目当ては悪魔の実だろ？」

「なっ!? ……………何故わかったんだい?」

「だはははは!! 当てずっぽうだったが、その反応だと凶星みたいだな!」

「チツ、誘導尋問とは喰えない男だねえ」

「人をからかうのはおれの趣味なんだ」

「へえ、そうかい」

随分良い趣味なこった。

だが不思議と嫌な気はしない。人を惹き付ける力。

これもまたシャンクスが大海賊の頭としてやっていける所以だろうね。

まあ惹かれたと言っても人柄にであって、決して異性としてではない。

何故ならアタシは惚れる側じゃあなくて惚れられる側だからだ。

これは天地がひっくり返ろうと変わらぬ不変のものなのさ。

「そーいや嬢ちゃん」

「嬢ちゃんじゃあない。アタシの名前はアルビダだ」

「いいや、まだまだ嬢ちゃんだよ」

「クソツ……………んで、何だい?」

「悪魔の実が欲しいらしいが、何の実か決まってるのか? それとも悪魔の実なら何で

も良いのか?」

「ああもう、隠しても仕方ないから言うよ。スベスベの実さ」

「成る程。なら、そうだな……そのスベスベの実、おれが持つて言ったら嬢ちゃんはどうする？」

「……………は？」

聞き間違いか？ 今スベスベの実を持つてるって……

「もう一度聞こうか。おれがスベスベの実を持つてるんだったら嬢ちゃんは どうするんだ？」

「そんなもん……」

そんなもんどうするんだ？ どうすれば良い？

頭下げればくれるのか？ いや、いくら懐が深そうだからと言って、出会って間もないのに素直に渡すわけない。

ならば金を払うか？ 最低でも一億ベリーは下らない悪魔の実を買う金なんか持つていないわけない。

これは……シヤンクスはアタシを試してるのか？

どんな答えを出すかでアタシを更に見極めようとしているのだろうか。

なんだ……何が正解だ。

いや、そうじゃあない。この問いに正解したところでスベスベの実が手に入る訳でも

ないだろ。

考えがグルグル頭の中で回る。

ああでもない、こうでもない。出口のない袋小路だ。

なにか突破口さえあれば……突破口………突破口？

ああ、そうだよ。あるじゃあないか。とても簡単な突破口が。

強大過ぎるシャンクスが存在感に無意識下でその答えを避けていただけだ。

アタシは海賊。海の無法者。だったらー

「そんなもん、力尽くで奪い取ってやるさー！」

獰猛な笑みでシャンクスに答えを突き出す。

満面の笑みでシャンクスは答えを受けとる。

「そうだ、おれを誰だかわかった上でのその啖呵。その折れない心意気。それでこそ海

賊ってもんだ」

ま、駆け出しのヒヨツ子だがな。と余計な一言を添える。

直後に臨戦態勢に入った。

アタシはやや前傾姿勢。対するシャンクスは脱力したまま特に変わったところがな

いが、隙が全く見当たらない。

「あーあ、お頭の悪い癖だ。面白そうな奴を見つけるとすぐちよつかい出しちまう。ヤ

ソップ、ルウ、そののでつかい兄ちゃん連れて避難するぞ」

「あいよ」

「了解！」

生い茂る木々が風でざわめく。

チリチリと肌を焼くような、それでいて肩に重くのし掛かる重圧と威圧感。

ああ、なるほど。これは確かに”霸王”だわ。

気を強く持つていないと意識を失いそうになる。

うーん、才能か。霸王色を持つていないアタシは相殺させることは出来ず、ひたすらに耐えるしかない。

「へえ、耐えるか」

「余裕面してられるのも今の内だよ」

わざとなのか、会話に気を取られたからなのか、恐らく前者だが一瞬だけ霸王色の威圧が緩んだ。

「剃ソル！」

まるで消えたように見えるほどの高速移動を可能にする体技。

一気に距離を詰め、顔面目掛けて武装色の覇気を纏った右脚でハイキックを放つ。

が、なんてこともないかのように無造作に挙げられた左腕でガードされた。

「おまけにアタシの覇気よりもほんの少しだけ多く覇気を纏うと言う細かい芸当付き。  
「まだだよっ!」

今度は月歩ゲッポウで空中を駆け巡り、四方八方から拳や蹴りの連打。

しかし、そのどれもが通らない。

見聞色の覇気で動きを先読みされ、シャンクスは一つ一つの打撃を丁寧テイジヤウに両腕だけで捌いていく。

どれもが覇気を込めた連打であり、その全てを紙一重上回る覇気で防御された。

「武装色の質は良いがコントロールがまだまだだな」

「うるっさいっ!!」

顔面へのフック気味のパンチをフェイント、そして目隠しにして、死角からの膝蹴りを見舞う。

勢いに乗る前に手で押さえ付けられた。

今度は逆に直線的なテレフォンパンチ。衝撃力なら今までで一番のものだ。

何気なく顔の前で開いた掌で難なく受け止められた。

何度も、何度も、何度も。

何度やっても防がれる。攻略法が見当たらない。

アタシの攻撃が弱すぎるんじゃない。

その証拠に、覇気を纏った攻撃のぶつかり合いは辺り一面に強烈な衝撃波を撒き散らし、木々を薙ぎ倒してシャンクスを中心とした巨大な円形のフィールドと化している。そんな攻撃を幾度も受け止めているはずなのに、シャンクスは未だ悠然とそこに立っている。

対するアタシは体力と覇気をどんどん削られていく。

なんと言おうか、まるで難攻不落の要塞に生身で挑んでいる気分だ。

じゃあ諦めるか？ と問われればNOと応えてやる。絶対に御免だね。

”チャホヤさりたい”なんて言うバカみたいな想いで八年間鍛練を積んできたんだ。

そりゃあ最初の頃はふと我に帰ることだってあったさ。

それでも周りから称賛の声を浴びればやっぱりコレしかないと思いつ返す。

この八年間は本物だ。前世とかそんなの関係なく、この八年間でやって来たことは俺アタシ

にとつて本物なんだ。

諦めたらその”本物”が嘘になってしまう。

八年の月日、これがアタシにとつて恐らく本当の原点。

命を賭けるに値するものだ。

「眼は、死んでないようだな。それどころかさつきよりギラついてるじゃないか。心境の変化でもあったか？」

「ハア……ハア………なにも？　ただ、昔をね……ちよつと思ひ返してただけさ」

「そうか。で、まだやるか？　勝ち目がないのは嬢ちゃんもわかっているだろう。なにもここで命賭けなくてもいつかスベスベの実よりも強力な悪魔の実が手に入る可能性がー」

「愚問だね。アタシにとつちやあスベスベの実が何よりも欲しいのさ」

「だがおれに勝てなきや手に入らない。そしておれに勝つことも無理そうだが、それでもやるのか？」

「だから愚問だよ。逆に聞くよ、赤髪。手の届きそうな所に”ひとつなぎの大秘宝”があるかもしれない。だがその前には自分より圧倒的に強い怪物を倒さなきやあならないうーアంతならどうする」

「ふっ……なるほど。嬢ちゃんにとつて”ひとつなぎの大秘宝”とたった一つの悪魔の実と同じ価値ってことか」

「違う。アタシにとつては”ひとつなぎの大秘宝”よりも重い！」

アタシのその答えにシャンクスは俯き、肩を震わせる。

覇王色の覇気による息苦しい重圧感は霧散し、シャンクスの笑い声が辺りに響き渡る。

「だあーっはっはっはっ!!　そう言い切れる奴は偉大なる航路でもそうそういいねえよ」

心から愉快そうにそう言い放つ。

世界中を股にかけ海を旅する大海賊”赤髪のシャンクス”。

彼が見てきた海賊の中には”ひとつなぎの大秘宝”と言葉にするだけで妄言だと口にする者や、群雄割拠する海の大物たちにビビって諦める者が大多数だった。

しかしどうだ？

目の前の麗らかな少女は”ひとつなぎの大秘宝”を妄言ととらず、かと言って恐れず。

その上で自分の中にはそれより重いものがあると言い切った。

揺れることなき確固たる価値観。

この少女は”霸王”ではない。王の素質はないがそれでも。

「ああ、認めよう。他の誰がなんと言おうがおれが認める。……嬢ちゃん、お前さんは紛れもない、”海賊”だよ」

「アンタに認めてもらえるなんて嬉しいねえっ!!」

この日最速の剃で接近し、強烈な蹴りを見舞う。

まだ会得していないが嵐脚に肉薄するほどの速度で脚を振り抜い——

「がっ!! ………………っ!?!」

気付けばシャンクスの右の拳が腹に突き刺さっていた。

戦いの余波に巻き込まれずに無事だった木々を薙ぎ倒しながら、一直線に吹き飛ばされる。

飛びそうな意識を必死に保ち、気が付けばキャンプ地でもあった砂浜にいた。

くつきりと残る、アタシが吹き飛ばされた軌跡を悠然と歩きながら辿るシャンクス。

いやあ、これは本当に化け物だ。

「さあ、まだ立てるだろう?」

はっ! 出来るならこのまま寝ちまいたいくらいだよ!

「一人の海賊として、おれが相手をしてやる」

そりゃあ光栄なことだ。

「見せてみる。お前さんの海賊としての力を!」

正真正銘、ここからが”赤髪のシャンクス”との本当の”闘い”。

さあてどうするかねえ……………

## 姐さんの意地と赤髪之力

クソツ……

ギリギリ武装色の覇気でガードしたけれど、アタシの世界一美しい肌に傷が付いた。これは許されることじゃあないよ……

と言ったところで、現状は打つ手なしなんだけれどね。

でも打つ手がないだけで、打ち続けることは出来る。

たとえ王手詰みチエックメイトをかけられていたとしても、手を止めるわけにはいかない。

「剃ソル！ 月歩ゲツボウ！」

六式の中でも敢えて鉄塊テツカイや指銃シガンや紙絵カミエを捨てて、この二つを重点的に鍛えてきた。剃ソルの速度で宙を跳ね回る。

攻撃にいくフリを織り混ぜてタイミングを見計らい………今っ!!

「だが、それは読めてる」

後方上部からの強襲も、後ろ回し蹴りでカウンターを合わせられた。

この程度じゃあ意味がないのはわかっていたよ。

かなり厳しいタイミングだったが、迫り来る足裏とアタシの足裏を重ね合わせ、相手

の蹴りの勢いを利用して大きく空に舞う。

「だったら、これならどうだいっ!？」

ゲッポウ  
月歩で空を蹴り急降下し、速度と重力を加算したー

「受けてたとう」

ストンピング  
踏みつけ!

腕をクロスさせガードするシャンクス。

隕石のようなその一撃は、しかしガードを打ち砕くことは出来ず。

「クソツ……これでも無理かい」

「まあな。だが悪くない一撃だ」

轟音と爆発的な衝撃波を撒き散らし、海に大きな荒波を起てる。

さつきまでとは違い、アタシの覇気を紙一重上回ると言う芸当はもうしていないみたいだ。

硬過ぎて思わず修行を始めた頃を思い出したよ。

大岩に指銃シガンを放って突き指したとき。

それ以来指銃シガンには目もくれなくなっただが、今の状況も同じようなものかねえ……

……いや、違うね。

気に入くわなければどシャンクスには明確な隙がある。

実際には隙と言えるほどのものじゃあないけれど、付け入る間があると言う意味では同じことだ。

気に入くわれないと言うのは、アタシのことを海賊として認めていると言ったのに、恐らく無意識下で手加減していることだ。

さっきのガードも後ろ回し蹴りも、アタシを吹き飛ばしたパンチもそう。

確かにアタシを上回る覇気を纏ってはいたけれど、どれも纏った覇気の量は一定だった。

『このくらいの覇気で十分だろう』と言うわけじゃあないと思う。

多分その覇気の量と言うのは彼にとつて”大海賊の赤髻”として戦闘を行う上での最低ライン。

本気なんだろうが全力じゃあない。

そこそアタシが付け入るところ。

まあ考え違いだったら根底から覆されるんだけれどね。

「おっと、何か企んでやがるな？」

「嬉しそうにしてるんじゃないよ！ やられるとは考えなかったのかい!!」

「そりゃ素敵だ」

「この……っ！ 減らず口がっ!!」

会話の間も攻防が繰り広げられる。まあ内容は一方的なものではあるんだけどね。アタシの打撃は難なく防がれ、お返しとばかりに似たような軌跡を描いたカウンターの返すシャンクス。

直撃こそ免れているものの、既に顔や体中に大量の擦り傷が出来上がっている。

「アタシの美貌に付けた傷は高くつくよっ!!」

「安心しろ！ お前さんはまだガキだが、傷付いても良い女になるだろうよー」

「アタシが傷を付けてるんじゃないかっ!!」

確かにアタシなら傷があつたところで魅力は損なわれないけれど、パーフェクトなア

タシで居たいんだ！

傷のこともそうだけれど、何よりこのままじゃあ罅が明かない。

賭けに出るしかない。

もしこの賭けに失敗したら……

いや、止そう。そうなつたらその時に考えれば良いだけだ。

やるべきことをしつかりやり遂げる。

今考えるのはそれだけで良い。

「どうした？ 覇気が乱れてきてるぞ？」

「別に……っ。大したことじゃあないよ……！」

攻撃も回避も、ほんの僅かに精彩を欠く——

ように見せかける。

これが賭けの第一関門。

限界に近いことを感じ取ってくればそれで良い。

猫を被ったりしなくてもチャホヤされてきた弊害でアタシは演技は苦手だが、幸い本  
当に限界に近いので演技の必要はなかった。

今は気力だけで動いているようなもんさ。

そして第二関門。

まずは捨てつぱちのような攻撃を仕掛ける。

当然の如く防がれるがそれで良い。

運も味方して砂浜に足をとられる。

これで限界が遂に来たと思ってくれるだろう。

本題はここからさ。

危険度で言えばここが最大の難所だ。

何故なら——

「良くやった。お前さんならまだまだ高みを目指せる」

「クツ……………っ!!」

「シャンクスが放つ強烈と言う言葉すら生温い右脚の蹴りを受け止めなくてはならぬいから。」

「——覚悟は出来てたからね。」

「思いきり地を踏み締め、迫り来る剛脚を左腕を曲げて耐える。」

「吹き飛ばされちゃあダメだ。賭けが終わっちゃう。」

「耐える！ 耐える！ 耐える！ 耐える！」

「ここを乗り越えろ！」

「そうすれば道が拓ける！」

「果たして。」

「アタシは耐えた。」

「耐えきった。」

「見聞色の覇気で調べたところ、左腕の骨は完全に折れることはなかったもののヒビが入っている。」

むしろその程度で済んだことは奇跡かもしれない。

良いね、本当に運が味方しているのかもしれないよ。

だつて見な。

シャンクスの驚いてる顔をさ。

人をからかうのが好きでいつも飄々としていたシャンクスが浮かべた驚愕の表情。

本当に一瞬だが敢えて、ではなく素でシャンクスの動きが止まる。

逃すわけにはいかない!!

「喰らいなああッ!!」

最終関門。

なんてことはない。

第一第二関門と突破して、最後に勝てるかどうか。

ただそれだけのことさ。

原作でルフィは覇気の使いすぎで一時行動不能に陥っていた。

ギア4、バウンドマンだったかな。

恐らくあれは大量の覇気を使用し続け、その間の戦闘能力を上げるものだろう。

ならアタシはその逆だ。

戦闘能力を上げ続けなくても良い。

行動不能になってしまいう量の覇気を一撃に込める！

最終関門は結局のところ、シャンクスを倒せるか倒せないか。

その二択でしかない。

「吹き飛ばされたお返しだ！ 受け取りなっ!!」

シャンクスが攻勢に移った時と逆のシチュエーション。

今度は限界まで振り絞った覇気を纏うアタシの右拳がシャンクスの腹に突き刺さる。

ある一定レベルの量の覇気を上回れただろうか……

結果の如何はと言うと――

「ぐっ……………!」

倒しきれなかった。

ダメだったか……

アタシにはもう雀の涙ほどの覇気しか残っていない。

戦闘続行は不可能だ。

アタシの負けか……

まあでも十分……と言うか花丸満点以上の評価を付けても良いんじゃないかな？  
だつてさ。

あのシャンクスが片膝を地に突けちまつてるんだからね。

「嘘だろおっ!? オイオイ、マジかよあの嬢ちゃん！ ありえねえだろ!? お頭は”赤髪”だぞっ!?”

「落ち着けてヤソツプ、おれも驚いてるんだ。あまり騒がないでくれ。……それとルウ、お前は呆けすぎだ。肉落としてんぞ」

外野で観戦していた赤髪海賊団の船員クルーすら、信じられないものを見たと言ったような反応だ。

自分で言っちゃあなんだが、こんな小娘相手に”赤髪のシャンクス”が膝を突くなんて未来、誰が想像する？

彼らのリアクションはそう言うことなのだろう。

「嬢ちゃん……いや、」アルビダ。まず一言謝らせてくれ」

何事もなかったかのように立ち上がるシャンクス。

ダメージがあつたことはあつたのだろうが、全くそれを感じさせない。

むしろエンジンが暖まってきた、つてところかな？

対するアタシは満身創痍。

体力も限界寸前、覇気も限界寸前、ダメージの許容量も限界寸前のトリプル役満つて

やつさ。

声を出すのもしんどい。

『相手をしてやる』なんて言ったが、心のどこかでお前さんのことを下に見てしまつていたようだ。情けねえ……本当にすまないことをした」

ニヤリと、口端を吊り上げることで返答とした。

「だからアルビダ、お前さんのことは強敵として見る。お前さんがおれに立ち向かつたように、おれもお前さんに立ち向う」

スラリと、今まで腰に佩いていた剣を抜く。

「峰打ちだが………覚悟は？」

「上等」

一閃。

逆袈裟に振り上げられた剣撃。

なけなしの覇気を纏い防御に回すが、焼け石に水だろうね。

やらないよりは断然マシだ。

世界一の剣士とライバル関係だけあって、その剣撃は島の反対側まで突き抜ける。それだけに留まらず、かなりの距離の海が割断されていた。

まあでも甘いと言うかなんと言うか。

気に入った相手には非情になりきれないんじゃないか？ ” 赤髪のシャンクス ”

と言う男は。

アタシのことを気に入ってくれたんなら、そりやあ嬉しいけれどさ。  
峰打ちはともかく、この期に及んで剣撃に覇気に乗せないなんてね。

ああ、悔しいなあ……

気を使わせちまつた……

チクシヨウ……もつと、もつと強くなつてー

いや、やつぱりいいや。

やりなおし。

チクシヨウ……もつと、もつと美しくなつてやる……！

あ、やば。

意識が………

—

「姐さんっ!!」

敬愛する船長アルビダがやられたのを見てボガードが駆け出す。

一騎討ちと言うこともあり、ボガードは傍観者にしかなれなかった。

ボガードにとってアルビダは憧れの対象だった。

飛び抜けた美貌は勿論のこと、それを磨きあげるために続けた努力に裏打ちされた自分に対する絶対的な自信。

そんなアルビダの役に立ちたいという思いから、ボガードは鍛練で自分を追い込み、コンプレックスだった華奢で女顔だった自分に別れを告げ、筋骨隆々になるまで鍛え上げた。

それ以外にも実家が料理屋だったので料理の腕を磨き、空いた時間で航海術を学び、更に空いた時間で植物学も勉強した。

全てはアルビダのために。

そして今、その憧れは地に臥せっている。

「オオオオオオッ!!」

敵討ち。

アルビダはボガードより断然強い。

そんなアルビダが負けた相手に挑むのは無謀すぎるかもしれないが、ボガードには関係なかった。

「その心意気は買うが、坊主にはまだこのステージは早い」

シヤンクスが睨みを効かす。

それだけでボガードは何が起きたか理解出来ないまま気を失った。

「さて、終わりだな」

「お頭、流石にはつちやけ過ぎだぜ。まあお頭が膝を突くなんて思ってもみなかったがな」

「ああ、あれは結構効いた」

嬉しそうに頬を緩めながら腹部を擦る。

そんなシヤンクスに、副船長ベン・ベックマンは呆れてこめかみを押さえ、頭かぶりを振るつた。

「だっはっはっ！ まあ良いじゃねえか！ おーい船医！！ こいつらの治療してやれ！！

それと絶対傷跡は残さないようにしろよ。じゃないとこのおっかない嬢ちゃんが何するかわからねえ」

「自分で付けた傷のくせに良く言うぜ、まったく」

んあ……………

あれ？　（こ）は……………

「おう、起きたかアルビダ」

「げっ、シャンクス……………」

「げっ、とは失礼なやつだなあ。ちゃんと傷跡が残らねえよう治療してやったんだぞ」

「そうかい。まあ礼は言っておくよ」

ああ、そうだ。負けたんだった。

戦場となった砂浜で目を覚ましたアタシは本当に傷跡が残っていないか確認する。

うん、骨にヒビが入った左腕の青あざはともかく、それ以外の擦過傷なんかは目立たなくなっている。

数日もすれば綺麗さっぱり消え去るだろうね。

あ、やっぱりアタシの肌に傷が付いた事実が消えるわけじゃあないから殺意が湧いてきた。

「がるるるるるるる」

「野生に戻るな」

辺りは日が落ちて真っ暗。

しかし無駄にでかいキャンプファイアーが辺りを灯し、それを囲んで赤髪海賊団の面々がドンチャン騒ぎをしている。

「はあ……アタシはどのくらい寝てた?」

「半日くらいだ」

「半日ねえ……ん? 半日? いや、そんな短時間で傷跡って消えないんじゃないのかい?」

「ウチの船医は優秀だからな」

「いやいや、優秀だけで済むのは……」

「ウチの船医は優秀だからな」

「ああ、はいはい。わかったよ。それで納得すりやあ良いんだろう?」

「わかりや良い」

その後少しの間他愛もない会話をした。

そして暫くするとボガードくんとベックマンがアタシの食事を持ってきてくれた。

「ほらよアルビダ。にしてもお前のとこのボガードの料理美味いな」

「当然さ。アタシの船員クルーだからね」

「姐さん、すいやせん。あつしはなにも出来ず気を失っちまいやした」

「アンタも挑んだのかい？ まったく、なに無茶してんのさ」

「ヘイ、すいやせん姐さん」

「はあ……別に良いよ」

ゴロゴロとした肉が入った、スパイスの効いたシチューを口に運ぶ。

まあ前世で言うカレーみたいなものだね。

「美味っ!!」

スパイスの香りが食欲を刺激し続け、スプーンを動かす手が止まらない。

肉と野菜に隠し味で加えられた果物の旨味がスープに溶け出して、絶妙なハーモニーを奏でる。

気付けばアタシの皿は空になっていた。

「食い終わったみたいだな」

シャンクスは律儀に待っていてくれたようだ。

「さて、本題に入ろうか。スベスベの実のことだ」

「っ！……ああ」

「実のところな、おれはスベスベの実を所持してねえ。悪いな、あれはお前さんと遊びた

くなって吐いたおれの嘘だ」

「……………はあ。まあ騙されたアタシが悪いしね、別に良いよ。それに少し……………いや、かなり安堵してる」

「そうか。そいつはどうしてだ？」

「寄越せつてアンタに言っても簡単に渡すはずないだろう？ 力尽くで奪うつてのはもつと無理だ。なら、この海を探し尽くす方がまだ現実的つてもんさ」

そう、シャンクスが持つてると言つた時に奪い取ろうとしたけれど、良く考えなくても彼がスベスベの実を所持していない方が都合が良い。

絶対に開かない金庫を爪楊枝でこじ開けようとするみたいなものだからね。

「そうか。それじゃ、海賊の先輩から一つアドバイスだ。今回おれはアルビダを騙す形になつたが、”騙し討ち”つてのは海賊の作法の一つだ。聖者でも相手にしねえ限り、卑怯なんて甘いことは言えねえ。お前さんはちよつと直情すぎるな」

「直情？」

「ああ。まあその辺は自分で考えてくれ」

直情ねえ…………

心当たりは……………ありすぎるんだよねえ。

誉められればすぐに乗せられちまうし。単純とも言う。

「それと、これをやるよ」

「ん？ 本かい？」

「悪魔の実凶鑑だ。悪魔の实の見た目は色々あるからな。目当てのものの色や形がわからないと不便だろ。まあ、海賊の作法だの何だのと言ったが、騙しちまった詫びだ」

「おお！ そいつはありがたいねえ！」

早速ウキウキしながらページを捲る。

んあ？ 何だこれ？ 絵本か？

「ほら騙された！ おもしろえ!!」

「なっ!? この野郎……!!」

「ひいーっ！ ひいーっ！ 腹いてえ、涙が止まらねえ！ ああーっ！ 笑った笑った。

ほら、こつちが本物の凶鑑だ」

涙を拭いながら渡された凶鑑を強引に手繰り寄せる。

パラパラと数ページ捲ってみたところ、今度は本物のだった。

憎たらしいが素直に受け取っておこう。

今回のこの無人島での探索は結果的にアタシにとってプラスになった。

最大目標こそ見つからなかったものの、悪魔の実凶鑑が手に入ったことでその実の名

称がわかるようになった。

そしてスベスベの實の所在が最シヤンクスが所持していた悪のパターンではないこともわかった。

ただアタシの自慢の肌に傷が付いてしまったのはマイナスだ。

むしろプラスマイナスしたらマイナスなんじゃあないのか？

まあ良いや。寝起き間もないけれど、限界まで酷使した体に睡魔が襲ってくる。

もう一度寝よう。

翌朝。

アタシたちとシヤンクスたちは別々の島へ出航する。

最後に挨拶だけ交わしておこう。

「怪我の治療とかで世話になったね」

「ああ、おれたちの拠点はゴア王国のフーシャ村つてとこだ。機会があれば寄ってけよ」

「考えとくよ。アタシは骨に入ったヒビが治るまでオレンジの街に滞在してる。アタシ

のこの美しい姿を見たいのなら寄ってきな」

「相変わらず自信満々だな」

「適正評価だよ。いや、むしろ過小評価かもしれないねえ」

「言ってる。んじやあな」

「ああ」

シヤンクスたちは行つたか。

「いやあ、まさか海賊デビューの初戦が”赤髪のシヤンクス”とは夢にも思わなかったよ。」

悪い意味でな!!

勝つてこないのに喧嘩売るなんて、我ながらどうかしてたねえ。

言われたように直情すぎたのかもしれない。

もつとクレバーなやり方、やり過ぎし方もあつたのかもしれないけれど……

ああっ！ もう良いや!!

そもそも、矜持は持っているけれど海賊はアタシにとって手段に過ぎない。

”チャホヤさりたい”がために海賊になつたんだ。

比重を間違えちゃあいけないね。

さて、いつも通り出航の日は快晴、航海日和。

出戻りみたいになっちまったけれど、オレンジの街に向かうとしますか！

「行くよボガード！」

「へい、姐さん!!」

## 療養期間と一年間

ア・タ・シ・が！ 戻つて来たぞ、オレンジの街！

そう！ ほんの一週間くらい前に、町長のプードルさんに何か意味深なことを言い残して颯爽と去つて行つた、超絶美少女のアタシだ！

一片の恥ずかしげもなく戻つて来た！

常世の金銀財宝の総てと比べても、アタシの方が尊ばれる。

絶対的な美しさと唯一無二の価値！

そんな、生きているだけで世界の至宝となれるアタシに恥部なんて有ろうはずがない！

たまたま船着き場にいた数名の中にプードルさんもいたので、彼が代表して迎え入れてくれた。

「ちよつと前ぶりだねえ町長」

「おお！ アルビダちゃんが出て行つてから、街の皆が寂しがつておつたぞ！ ささ、ワシはこの街の長さながら、皆を代表して歓迎するわい」

「当然だね。アタシがいるとじゃないとじゃあ、華やかさは雲泥の差に決まっているじゃ

あないか。さあ、アタシをもてなしな！　ちゃんとチャホヤするんだよ！」

その後、オレンジの街の住人たちに暖かく迎え入れられた。

プードルさんにはアタシが戻って来た理由——左腕の怪我が癒えるまで滞在したいと言う旨を伝えた。

当然のことながら、アタシの魅惑の細腕が腫れ上がっていたことに怒ったプードルさんは、顔を真っ赤にしてちやちな鎧と槍を装備して「そんな不屈き者、ワシが懲らしめてやる！」と言つて臨戦態勢を整えていた。

なので別に気にしていないと言う事を伝え宥める。

まあ、シャンクスの言葉を借りると『傷が付いても良い女』だからねえ。アタシは。

むしろ怪我も美点に変わってしまう、恐ろしさすら感じるアタシの無限のポテンシャル。

んん、マーベラス。

だが傷を付けた張本人のシャンクスは許さん。

あの無人島で採れた大量の果物は、ボガードくんがそこそこ日持ちするようにいつの間にか加工していたみたいだ。

実はアタシが今着ている服を作ったのもボガードくんだったりする。

料理や裁縫が得意な元男の娘な彼の女子力は前々から高いと思っていた。

けれど、食品加工とか、一から服を作るのはそりやあもう職人の域じゃあないか。

いやあ、有能だねえ（白目）

とまあ、その大量の果物は店に持っていったらまあまあな値段になった。

海賊になって初めての現金収入が略奪などではなく、果物の加工業とは……

原作のアタシを考えればそりやあ、実に小物らしくて良いんだけどね。<sup>アルビタ</sup>

夜になり、前回の滞在時のように「ブールドルさんに”お願い”すればタダ飯タダ酒にありつける。

街の人もたくさん酒場に寄って来てくれた。

まあアタシがいるのだから当然のことだがね！

空が白んでくるまで、飲んで食ったのドンチャン騒ぎ。

翌日には二日酔いが多数発生し、皆ゾンビのようになっていた。

そしてまたしてもボガードくんの大活躍。

二日酔いに効く薬草なんかを煎じたり、街の料理屋の手伝いをしたり、被服店では服のデザインなんかも手掛けたりしていた。

彼はどこへ向かっているんだろうねえ……

そんなオレンジの街での日々を過ごして十日余り。

ちよつとアタシも信じられないが、腕の怪我はほぼ治っていた。

僅かな違和感はあるけれど、腫れも青あざも引いて元のきめ細やかなビューティースキンに戻っている。

前世の知識からこの異常な回復力に驚いたけれど、良く考えたら原作キャラたちも大概こんな感じだった気がする。

まあ、ポジティブに受け取ろうじゃあないか。

念のため後数日だけ様子を見てから出航しよう。

この街の居心地は良いが、本来の目的を見失つちやあいけないね。

そのことをプードルさんに言ったら「そうか」と寂しそうにしながら返してくれた。わかるよ？

アタシがいるってだけでどんな田舎街でも、「マリージョア」より上になつちまうんだからねえ。

それ以上しんみりすることにはならず、世間話を交わしていたら「海賊が来たぞ！」と怒号が響き渡った。

アタシがいる街に襲撃に来るとは良い度胸じゃあないか。  
その面を拝んでやろうと港へ向かった。

うん、シャンクスだった。

「町長、そう焦らなくても良いよ」

「しかし、ワシはこの街の長さながら！ 万が一があるやも知れん！」

「アイツはムカつく奴だけれどね、堅気に手を出すような男じゃあない。……ムカつく奴だけれどね」

大事なことなので二回言っておいた。

”赤髪海賊団”の船、”レットフォース号”が着港する。

だが降りてきたのはシャンクスだけ。

そしてその容姿を見て『なるほどねえ』と思った。

そうか……そんな時期だったか。

まあ”何があつたのか”をアタシが知っているのはおかしいので、皮肉を交えてそれとなく聞いてみる。

「アンタ、随分とまあイメージチェンジしたもんだねえ？」

「ははは！ どうだ、似合ってるか？」

「チツ、皮肉だよ。……で？ 麦わら帽子と左腕はどこに忘れてきたんだい？」

「忘れたんじゃないよ。未来に託してきた」

「そう言いながら、愛おしそうに左腕の在った場所を擦った。」

「取りあえず挨拶だけでも、と思ってるな」

「そうかい。じゃあ受け取っておくよ」

「ああ。多くは語らねえが、”お前さんのことも、待ってる”」

「そう言い残して、アタシに背を向け船へと帰って行った。」

海賊らしいサツパリとした別れ。  
凄くしつくりくるね。

さて、アタシたちも再びの出航をする日が来た。

一度目にオレンジの街を離れた時よりも多くの住人が見送りに来てくれた。

アタシの魅力にメロメロだったことを差し引いても、この街の人たちは善い人ばかりだ。

一言二言交わし船に乗る。

相変わらぬの晴天、航海日和。

「行くよボガード！」

「へい、姐さん！」

オレンジの街を出航して約一年。

この一年間で特筆すべき大きな出来事は、アタシたちの周りでは起きなかつた。細やかな出来事なら多々あつたけれど。

例えば、他の海賊と出会したりだとかね。

最弱の海、東の海イーストブルーの名に恥じぬ（？）凡百の海賊共だつたさ。

多くても精々が二十〜三十人程度の海賊団で、案山子を相手にしているみたいなもの

だった。

シャンクスのせいで感覚が狂っちまっていたけれど、本来彼は東の海（こんなどころ）で出会うはずのない海の皇帝。

雑兵を相手にしたことで、シャンクスの気持ちが無となくわかつた気がする。

まあ、そのすぐく東（イーストブル）の海らしい海賊共と海の上でばったり会ったんだ。

出会い頭に大砲を何発も撃たれたけれど、月歩（ゲッポウ）と武装色の覇気を纏った蹴りで全弾海に叩き落としてやった。

奴らが啞然としている間に敵船に乗り込んだらまあ大変。

アタシみたいな、ド級という言葉ですら陳腐に感じてしまうほどの美女が自分たちの船に降り立ったのだ。

『オオオオオオオッ!!』と言う歓声と共に目をハートマークに変える海賊たち。

うんうん。とても良い気分にさせてくれるじゃあないか。

それでも船長含め数人はアタシに襲い掛かって来たので、そいつらは適当にあしらって船から放り出しといた。

アタシに目と心を奪われて船に残った奴らには、アタシという存在を拜むことの出来た“見物料”として、船に積まれていた金銀財宝全てを貢がせてやった。

まあこいつら以外にも似たような奴らは多々現れたので、ほぼ同じ手法で根こそぎ財

宝は頂いた。

ベリーに換金したのなら結構な金額ーそれこそ小さめのキャラベル船なら買えそうなほどの量になったけれど、如何せんアタシたち”アルビダ海賊団”はまだ二名。

ボガードくに航海術があるとは言えたった二人ではそこまでの船は動かせないし、今の小船では財宝全てを積むことが出来なかつたので、スベスベの実搜索の道程で見付けたなにもない孤島に隠しておくことにした。

無防備に思われるかもしれないけれど、その孤島は断崖絶壁より酷い”ねずみ返し”状になっている崖を数十メートル登らないと上陸出来ない。

アタシは月歩ゲッポウが使えたので苦にならなかつたけれどね。

他の出来事で印象に残っているのはボガードくんのことだ。

何を血迷つたのか、いきなり『あつしを蹴つてくたせえ、姐さん』なんて言い出したのだ。

これを聞いた時は、ボガードくにそんな趣味があつたのかという困惑した。

そう言う”サービス”は受け付けていないんだよ。

まあ、良く良く聞いてみるところなんてことはない。

六式の中の鉄塊テックアイを会得するために、外部からの衝撃が欲しかつただけみたいだった。

言葉足らず感は否めなかったがな!!

揺れる小船の上ではひたすら覇気を磨き続け、島に着く度にボガードくんを足蹴にする日々。

ボガードくんは生傷が絶えることがなかったけれど、彼は遂に鉄塊テツカイを、ついぞというには大きすぎるかもしれないがアタシは嵐脚ランキヤクを会得することが出来た。

元々ボガードくんは三年間の下地があり、アタシが見切りを付けた鉄塊テツカイと指銃シガンを重点的に反復していたのだ。

会得した時は泣いて喜んでいたね。

ただ、アタシに足蹴にされて嬉しそうにしていたのは止めて欲しかったよ。

この一年間という月日。

まだスベスベの実は見つけることが出来ていない。

まあ焦ることはないさ。必ずある。

勿論、それは既にスベスベの能力者が存在しないと言う前提での話だがね。

もし……仮にだが、アタシの目の前にスベスベの能力者が現れたのならその時は――

いや、止そう。

仮定の話をしているても建設的じゃあない。

取り敢えず今は目の前のことだ。

もはや恒例となった海賊たちからの”貢ぎ物”。

大きな袋に入れて差し出されたそれらを肩に担ぎ、ボガードくんが待つ小船へと帰還する。

「お疲れさまでやす、姐さん」

「このくらいで疲れるなんてありやあしないよ。それよりも、そろそろ船室に宝の置き場所がなくなってきたねえ」

「へい、姐さん。そろそろあの孤島へ向かいやすか？」

「そうだねえ。三ヶ月とちよつとぶりつてところかい」

今まで計三回あの反り立った孤島に足を運んでいるのだが、率直に言つて効率が悪い。

何度も行つたり来たりしている分、探索の時間がそつちに取りられちまう。

そろそろ本格的に船員を集めて船を乗り換えるべきかねえ。

海賊としてのし上がろうなんてあまり考えちゃあいけないけれど、だからと言つて船員選びに妥協はしたくない。

アタシにはアタシに相応しい人材が絶対にいるはずだ。

そういう奴らを探さなきゃあならない。

はあ………実際に海賊になってみて初めてわかる身に染みる苦労ってものかね。

まあ、ひとまずこの財宝を隠し場所の孤島に置きに行かなくちゃあならない。

針路を定め、いつも通りの台詞を吐く。

「行くよボガード！」

「へい、姐さん！」

ーグウウ……

何処かで腹の鳴る音が聞こえた。

## 断崖の孤島と海のコックたち

”孤島”と言うだけあって、一番近い島からでも一週間近くはかかる。

一旦、この一年の期間中にオレンジの街と同じく海賊であるアタシたちを受け入れてくれる有人島に立ち寄り、一泊してから隠し財産のある断崖絶壁の孤島へと向かうことにした。

オレンジの街や”赤髪のシャンクス”など、原作に所縁のある土地や人物と早々に遭遇してしまったことから、この島に入るときも若干ビクビクして上陸したのは良い思い出だ。

結局、なにも原作とは関係のない小さな田舎街だったんだけれどね。

財宝でパンパンになった小船の船室では食料を置くスペースが心許なくなつて来たため、換金所の無理のない範囲で財宝をベリーに換え、その金で食料品を買い漁る。

それでもかなり余つたから酒場に行つて、その場にいた客全員に奢つてやった。

至高の芸術品よりも遥かに人の心を魅了するアタシと酒を飲み交わせる上に飲食費もアタシ持ちときたら、それはもう崇拜するレベルでアタシのことをかまってくれる。

勿論、一年の間にもちよくちよく寄つていたオレンジの街でも同じことをして、街の

皆もこのこと同じりアクションを取ってくれていた。

ああ……………気持ち良いねええええええつ!!

脳内物質の分泌が止まらない!!

……………溶けちまいそうだよ(恍惚)

アルコールも入って気分が良くなり、体が火照ってきたアタシは丈の短いジャケットを脱ぎ捨てる。

アタシの刺激的で蟲惑的で煩惱的な、白いビキニを身に付けた上半身が晒された。

その瞬間、世に並び立つもののないアタシのボディラインを見たことで、男女関係なく周りの客たちは危険なレベルの鼻血を吹き出し床に倒れた。

まったく……………アタシの美しさはなんて罪作りなんだろうか。

宴はそれにてお開きとなった。

アタシも出航に備えてそろそろ寝るとしよう。

やることはまだまだたくさんある。

スバスバの実の入手は勿論だけれど、そろそろ本格的に新しい船と船員クルーをどうにかしなくちやあならないね。

『お前がおれと、同じ夢を持ってたからだ』

『っ！………オールブルー』

『時期が来たら偉大なる航路グランドドラインを目指せ。一年の航海で発見は出来なかったが、おれはあの場所にオールブルーの可能性をみた』

ゲツソリと痩せ細った少年は、海を眺めながら十日程前の会話を思い出していた。

その少年は客船の見習いコックとして航行に帯同していた。

そして嵐と荒れ狂った海と共に襲撃に現れた海賊船。

そこで海賊の船長の男と共に海へ投げ出され、荒波に吞まれていき、気付けば岩肌剥き出しで植物すらない断崖絶壁の孤島へと二人は乗り上げていた。

奇跡的に残った食料を頼りに救助を待っていたが一ヶ月、二ヶ月と待つものの成果なし。

唯一、遭難から五日目に近くを船が通り掛かったのだが、大雨と落雷で助けを呼ぶ声

はかき消されてしまった。

大丈夫、絶対に救助は来る。と少年は自分に言い聞かし、空腹に耐えながら待ち続けた。

三十日が経過する。

まだ来ない。少年に分け与えられていた食料はつい先日、底をついた。

五十日が経過する。

地面の窪みに溜まった雨水を啜り、生にしがみついた。

七十日が経過する。

意識が朦朧とし始めた。

共に流された男の方へ様子を見に行ってみれば、まだ食料が残っているようだ。男の分の食料袋はいまだに膨らんでいた。

——殺してでも奪ってやる……！

包丁片手にそう決意し、男の食料袋を切り裂いた。

——が、中から現れたのは財宝のみ。

食料など一切見当たらなかったのだ。

男は自身で自身の足を切り離して、それを食べていた。初めから全ての食料は少年へと渡されていた。

何故なのかと。何故そうまでして自分を生かそうとしたのかと。

そう問い詰めて、男が返した答えが”同じ夢を持っていた”と言う。

『レストラン……………!!』

『そうだ……………この島から生きて出られたら、そいつをブツ建てようと思っていた』

『おれもそれ、手伝うよ！　だからまだ死ぬなよ！』

『ハツ……………てめエみたいな貧弱なチビナスじゃ無理だ』

『……………強くだってなるさ!!』

少年が涙を流しながらその会話を交わしたのは、もう十日と少し前。

もう餓死寸前の身ではあったが、生きてこの島を出るにあたり明確な目標が出来た。

——あと何日だって、何カ月だって生き延びてやる!!

少年はひたすら耐える。

限界以上の空腹に晒されて飛んでしまいそうになる意識を、歯を喰いしばって必死に堪える。

そして彼らの遭難から八十三日。

この島に近づいてくる小さな船影が少年の目に入った。

——飢えがもたらした幻覚かな？ …………… いや違う！ 本物だっ！ 幻なんかじゃないっ！！

体と声帯に鞭打ち、掠れる声で必死に声を上げた。

「おー……………い……………助けてくれえ……………おーい……………おーい……………おおおーいっ！」



隠し財産のある孤島へ向かう道すがら。

食料はかなり余裕があるとは言え、保存に適したものが多く生鮮食品は若干物足りない。

なので道中は釣りを楽しみながら魚を確保しようという話になった。

流石のハイスペック部下ボガードくんでも苦手なものはあつたようで、彼の釣果は散々なものだった。

なんせ合計で二匹しか釣れなかつたんだからねえ！

アタシは約一週間の間に五匹も釣り上げたのさ！

ボガードくんの倍以上だ。

どっちもどっちだ、つて？

まあしようがないじゃあないか。確かに釣った魚はその程度さ。  
でもヒットした数ならその三倍近くあつたんだよ。

全て海獣だったかな!!

流石に海王類こそ掛からなかったものの、小船の五〜十倍はデカイ海獣の入れ食い状態。

ここはいつから偉大なる航路並みになったのかと本気で思ったね。

当然これらを食料にしたところで船に入りきらないし、積載できる分の肉だけを切り取って亡骸は海へポイはもつたいないし、なんか気が引けた。

なので掛かった海獣たちは皆キャッチ&リリース（物理）することになった。襲いかかってくるんだから仕方ないじゃあないか。

そんな感じで、とても”のんびりまったり”とした船旅を続けて約一週間。

漸く目的の孤島が見えてきた。

遠目から見るとコック帽の先端のようにも見えるその孤島。

徐々に近付いていき、いつも停船している海から少し飛び出た岩に括り付ける舳もやいなくどを用意している時だった。

「……い………おおーいっ!!」

少し掠れた、こちらを呼ぶ声。

孤島を見上げれば金髪で左目を前髪で隠した、ガリガリに痩せ細った子供が弱々しく手を降りながらアタシたちに呼び掛ける。

「子供？ 何故あんなところに子供がいるんだい？ どう思うボガード？」

「ヘイ。遠目からでやすが、見たところかなり弱っていると思いやす。どうやって上陸したのはわかりやせんが、恐らく遭難したんでしよう。あつしらの財宝狙いではないと考えやす」

「ああ、アタシも同意見だよ。まあ万が一、罠って可能性も捨てきれないけれどアタシが見てくる。アンタは警戒を怠るんじやあないよ」

「ヘイ、姐さん」

船から飛び出し、<sup>ゲッポウ</sup>月歩で空中を駆け登る。

……まあ、ボガードくんには怪しまれないようにああ言ったけれど、これは完全に

アレ”だね。

原作イベントってやつだ。

この孤島を財宝の隠し場所を選んだ時にはもしかしたら、程度ではあったものの薄々” そうなんじやあないか”とは考えていた。

実際にはこの島はただ似ているだけの別の島って可能性もあつただけだね。

これでハッキリした。あの子供はサンジだ。

原作中の過去の回想で流され着いたあの島で、サンジとゼフは極限の空腹と戦いなが

ら、約三ヶ月を生き抜いていた。

そこでの経験からサンジのポリシーとして”食いたい奴には腹一杯食わせる”、”食べ物で粗末にするのは許さない”と言う考えが形成されたはずだ。

アタシたちがこの島を最後に立ち寄ったのは三ヶ月以上前。

その間に彼らは大嵐に逢って流され着いたのだろう。

それから現在までどれくらい経っているのかはわからないけれど、相当な日数が経過しているように見える。

まあ、見捨てるわけにもいかないし助けられるなら助けようかねえ。

原作通りに進むのならば他の船が助けにくるはずなのだが、ここで放置するのは寝覚めが悪い。

「珍しいねえ、こんな何もない島に来るなんて。観光かい？」

「た、助けて……助けてくれ！ あつちにクソジジイがいるんだ！」

「ふうん……まあ良いけれど、アタシは海賊だよ？ 何を要求するかわかったもんじゃあないけれど、それでも良いのかい？」

「かまわねえ！ お願いだからクソジジイを………おれのために体張ってくれたんだ。だから、だから頼むよ……」

アタシにそう嘆願するサンジ。

と言うかあのサンジがアタシの美貌に見惚れないとは……どうやら相当危ない状況だったらしいねえ。

サンジが言う”クソジジイ”、ゼフは島の反対側にいた。

右足を失っていたゼフはサンジと同じようにガリガリに痩せ細り、今にも餓死してしまいそうなほど弱っている。

見聞色の覇気で確かめると、ゼフの生命反応は風前の灯火に近かった。

とりあえず一人づつ抱え、島から船に向かって飛び降りる。

そしてゼフが持っていた財宝は一緒に船に乗せることにした。

逆に元々船に積んでいた財宝の方は島へ運び、ちゃんと隠してある。

どう隠したのかと言えば”首領・クリーク”もかくや、と言うレベルのボガードくんの怪力でねずみ返しになっている断崖絶壁をロッククライミング。

そうやって登って来たボガードくんの怪力をまたも発揮させて、島中央の大岩をどかす。

その下には元々大きな窪みがあったので、そこに隠していたのだ。

大岩は蓋代わりだね。

船へ戻り、ボガードくんが作った流動食を食べさせる。

スツカスカの胃袋にいきなり固形物は厳しいだろうという判断だ。

「エグツ……ヒック………いー うめえ……うめえ………」

アタシも同じものを食べてみたが、正直ボガードくんの普段の料理にはかなり劣る。流動食は初めて作った、とも言っていたし、材料もとにかく胃に優しいものだったので仕方がない。

ただサンジの方は咽び泣きながら、一心不乱に料理に貪りついていた。

ゼフも声こそ上げることにはなかったが、目尻から涙を流してゆつくりとスプーンを保持した手を動かしている。

その後、ちやちな救急箱に入っていた消毒液でゼフの右足断面の傷を消毒する。

手遅れかもしれないけれど、やらないよりは良いだろうという判断だ。

流星のボガードくんも本格的な医療の心得はなかったらしいが、気休めの応急手当なら出来ると本人が言っていた。

なので泥のように眠ってしまったサンジとゼフはボガードくんに任せ、アタシは船室から出る。

「はあ……原作イベントに介入かあ……」

正直なところ、原作の展開をどうしようとするつもりはない。原作通りに進めることに固執するつもりもない。

”あのかわいそうな過去を持つキャラの過去を改変して、幸せにしてやるぞ!”とか、今こいつを倒しておけば、未来での大勢の人の不幸を防げる!”など。

アタシにとつては本当にどうでも良いことだ。

そりゃあ目の前で救うことの出来る存在がいるのなら、まあ救っても良いかな? くらいには思っている。

逆に”ここで介入してしまうと今後めちゃくちゃになってしまう!”などといった場合でも、アタシの目標の妨げになるのなら進んで絡んでいくだろうね。

今ここにいるアタシは、ONE PIECEという物語のアルビダじゃあない。本当にこの世界を生きているアタシだ。

まあ勿論原作の知識を活かしてー悪用とも言うかもしれないけれどー身の振り舞いを考えることはあるけれどね。

むしろ覇気とか六式の体技なんかは典型的なそれだ。

ぶっちゃけ、サンジたちをあそこまで苦しめた状況の手助けをすることは出来たんだ。

ちよくちよくあの孤島に立ち寄って、保存食を置いていたりだとかね。それをしなかったのは、別にアタシのためにはならないから。

自分勝手な理由で海賊になったのだから、自分勝手な理由で行動をする。当然のことだよ。

帰路でもまたアタシたちは釣りを楽しんだ。

釣果は往路と変わらず。

殆ど魚は掛からないのに、海獣はウジャウジャ釣り上がってしまった。

三日もすれば、サンジとゼフは足取りは覚束ないものの、少しなら歩けるようになっていた。

ゼフの方は右足がないので、何かに掴まりながらだったけれど。

相変わらずこの世界の人間はバイタリティーがすごい。

まあ、どんどんと現れる海獣たちにサンジは目をまん丸にして驚いていたけれど、アタシのキャツチ&リリースを見て今度は目をキラキラと輝かせていた。

そして『うおおー!! 素敵だぜアルビダお姐様! 好きだー! 一生着いていきますよっ!!』とかほざいていた。

お前ゼフのレストランを手伝う決意はどこ行つた。

まあ、アタシほどの美女が相手なら気持ちには痛いほどわかるけれどね。

二人の経過は素人目に見ても順調に思える。

骨と皮だけみたいだった体に薄らと肉が付き始めている。

精神的にもかなり安定しているようだ。

彼らは『なにか手伝いたい』と言って聞かなかつたので、それにピンときて料理を振る舞ってもらつた。

つい先日まで衰弱していた人たちに酷だとは思つたが、まあ平気だろう。

美味いい。

アタシ基準で料理の腕の評価はと言うと

ゼフ<<越えられない壁>>ボガードくん≧サンジ

と言つたところだね。

島に着くまでの間、ボガードくんはゼフに料理の指南を願ひ出ていた。

うん、ボガードくんの料理の腕が更になるならアタシから言うことはないよ。その間サンジはアタシにデレデレしていた。

あの孤島に行く前に立ち寄った島に着いた。

日もくれ始めていたため、またしてもこの島で一泊することに。

サンジたちは島の小さな医院でちゃんとした治療を受けさせる。

まあ、すぐに回復することだろう。

飲めや騒げやの夜会が終わり、翌日。

アタシらを見送りに来た面々の中にサンジたちの姿があった。

松葉杖を突きながらゼフがアタシらに歩み寄る。

「本当に良いのか？」

「ん？ ああ、アンタの持ってた宝のことかい？ そりやあアンタがもし海賊、赫足のゼフ」だったのなら、遠慮なく貰っていたかもしれないねえ」

「っ!?! ……なんだ、知っていたのか。ならどうしてだ？」

「ふん。アンタは海の上でアタシたちに料理を振る舞った。もう海賊じゃない、”海のクック”だと思っただけけど……違ったのかい？」

「はっ！ そいつは違いねエな。だが海賊のお前が宝を前にして略奪しない理由にはならねエぞ？」

「そうだねえ……アタシの美意識が美しいと思わなかった。そんなところじゃあないかね」

「ククク、珍しい海賊もいたもんだ」

「でも、それなりのものは要求するよ」

スツ、と何も言わずボガードくんに手を差し出すと、準備してましたとばかりに掌サイズよりやや大きめの木の板と筆を渡してくれた。

うーん。以心伝心。

その木の板に大きく「アタシ」と書いて、綺麗に半分<sup>ハーフ</sup>に切断する。

半分はアタシ、そしてもう半分をゼフに手渡した。

「ハレハレ」

「割り符だね。船の中で言ってたじゃあないか。アンタたち海上レストランを開くんだろう？ そいつは期間無制限、回数無制限で使えるアンタたちの店のフリーパスさ。アタシらはずうとタダで、アンタたちの店を利用出来るものだね」

「ハンツ……成る程、がめついな」

ニヤリと笑うゼフ。

「アルビダお姐様！ おれ、もつと料理上手くなって待つてるから、レストランが完成したら必ず来てくれよ！」

「もちろんさ。それに、アタシほどの美女が来店したなんて周りが知ったら、それだけで大繁盛間違いなしだよ。客に忙殺されちまうかもねえ」

それにて別れを済ませ、船に乗り込もうと踵を返したアタシたちにゼフが待ったをかける。

「どうしたんだい？」

「ああ、最後にこれだけは伝えてエと思ってな」

隻足のためバランスが悪くなったが、地に膝を突きガバツと頭を下げる。

「……短い間だったが、クソ世話になった」

そう、ゼフは言い放った。

まあ、悪くない出会いだったねえ。

本当の意味で原作に介入したのは今回が初めて立ったけれど、そう悪いもんじゃあなかった。

さてさて、本日もまた、波は穏やか空は真つ青。

絶好の出航日和になったことだし、言つとこうかねえ。

「行くよボガード！」

「へい、姐さん！」

さて、次こそはスベスベの実に近付けると良いねえ。

## 海軍スルーとスベスベ

サンジたちと別れを済ませて一ヶ月と少し。

当然と言えば当然だけれど、海の上を巡っているのは海賊だけじゃあない。

今まで遭遇しなかったのが奇跡のようなもので、この日初めて海軍に出会した。

幸運と言うか、出会ったのが街の中だったので特に何かことが起こったと言うわけじゃあない。

海軍は新兵の訓練を兼ねた巡回パトロール中だったようで、アタシたちを一目で海賊だと見抜く眼力は持っていなかった。

この島に海軍支部はないし、偶々立ち寄っただけだろうね。

彼らがやって来た方向はアタシたちの船を停めた場所から離れている。

なのでこの島に海賊が潜伏しているとは思っていないみたいだ。

ちなみにだけれど、アタシはまだ賞金首にはなっていない。

堅気の連中にはまだ手を出していないので、一般人から見た“危険度”は殆どないんじゃないのだろうか。

時折襲撃に来る小物海賊たちから”貢ぎ物”をいただいてはいるが、アタシ自身戦うことにも敵を潰すことにも、そこまで拘りを持っていないので、貰うものだけ貰ったら基本的に放置している。

するとその海賊たちは失った財宝を補填しようとして活発に動き出すので、結果としてそれが隠れ蓑となりアタシたちは目立たなくなる。

そもそも海軍には認識されていないんじゃないか？

たった二人の海賊団だしね。

うーん……と言うかあれだね。

無自覚なマッチポンプになってた!!

アタシに貢ぐ↓補填に動く↓略奪する↓アタシに貢ぐ。

この無限ループ!

確かにアタシは堅気には手を出していないけれど、東の海イーストブルーの治安を悪くする原因の一つになってしまっていた。

いつかバレたらとんでもないことになりそうだ。

ごめんよ堅気の皆さん……

まあ、止めないけれどね。

今の状態はアタシにとつて非常に動きやすいし、海軍の目がないだけでスベスベの実の搜索はし易くなっている。

これだけで搜索難度はかなり下がるはずだ。

見つかる気配は全然ないけれど。

まあ海賊旗ゼンローソクを掲げている以上いつかは海軍に見つかるだろうし、その時になったら戦う覚悟は出来ている。

でもそれは今じゃあないって話だね。

と言うわけで、火元にはあまり近付きたくないので、そそくさとこの島から退散することにした。

次の島は恐らく無人島になるだろう。

道中でゼフ直伝のピラフをボガードくんが作ってくれたのだが、これがまた美味しい美味い。

「ボガード。料理の腕を上げたみたいだねえ」

「へい、ですがゼフの旦那には『これじゃ、まだまだ半人前だ』チビナスと言われやした。もつと

腕を上げてやりやすよ」

こ、これで半人前なのか……（驚愕）

まあなんにせよ、何かを磨くっていうのは良いことだ。

是非とも頑張ってもらいたいところだねえ。

さて。数日の航海を終え、次の島の島影が見えた。

今度こそ見つかるの良いなあ、なんて考えていると、その島には既に大きめの船が停船していた。

帆には黒地にドクロロー海賊旗（ジョリーロジャー）が掲げられている。

「先客みたいだねえ。ボガード、あの旗に見覚えは？」

「すいやせん。あつしの記憶が正しければ、東の海の手配書リストには載ってなかったはずですよ」

「そうかい、なら無名の海賊かねえ……。それにしちやあそこそ立派な船に乗ってるようだけれどね」

「へい、なにかちぐはぐに思えやす。どうしやすか、姐さん？」

「ふん。そんなもん決まってるだろう？ 行くよボガード！」

「へい、姐さんー！」

まだこの島は未搜索。

あの海賊共がスベスベの実を先に手に入れる可能性だつてあるのだ。

そう考えたら行かないわけにはいかないじゃあないか。

早速月歩<sup>ゲッポウ</sup>で跳んで行く。

かなり近付いたのだが砲撃や銃撃が飛んでこない。

見聞色の覇気で確認してみたところ、今船には五人しか乗っていないようだった。

恐らく船番に残されただけだろうねえ。

本陣は島の中に入って行つたというところだろう。

都合が良いのでそのまま船の甲板へと降りることにした。

「うおっ!? 空からいきなり美女オ!?!」

「そう、世界を揺るがす美女がやって来たよ! アンタたち! アタシは美しいかい?」

「おっ、おう!! そりやもちろん!」

「その通りだ! 見たことねえぜ、あんたほどの美人は!」

「当然じゃあないか! まあ、それは置いといて……アンタたち、縛られるのはお好きかい?」

「『『』………えっ。』』』」

船員全員を轡くわを噛ませてメインマストに縛り付けておいた。

そうしている間にボガードくんが上陸。

二人で手分けして船内を物色したが、目ぼしいものは見つからなかった。

財宝ですら殆ど積んでないような状態だったしね。

物色を終えたところで甲板に出る。

すると、この海賊団の本陣が丁度帰還していて、アタシたちの船と甲板にいるアタシたちを見て目を丸くしていた。

あちらさんの人数はざつと五十人弱と言ったところかな？

頭数だけならば今までアタシが出会った海賊たちの中で一番多い。

あ、サンクスたちがいたか。まあ、あれは例外だね。

さて、アタシが貢がせた今までの海賊の中には賞金首もいた。

精々が懸賞金二〜三百万ペリーの東イーストの海らしい小物だったかね。

そんな、一応は賞金首になった彼らでも多くて三十人ほどの海賊団だったのだ。

頭数だけ揃えても……と思うけれど、逆に言えばそれだけの数を揃えることが出来る

と言う証左にもなる。

約五十人。

なのイーストブルーに東の海では名の知られていない海賊。

どうにもちぐはぐだねえ。

まあ理由の内の一つとして考えられるのが

「アンタたち。偉大グランドライオンなる航路から来たのかい？」

これだ。

まあ他の海の可能性もあつたけれど、これが一番高い可能性だと思う。

何故ならアタシの知らない気配と言うか、異質な存在がその中に紛れていたから。

見聞色に初めて引つ掛かる異質な存在のパターン。

シヤンクスの場合には存在感がデカすぎただけなのだが、今回は違う。

生命力はそれほどでもないのに、他と全く異なる違和感。

まあこれはほぼ間違いないだろうが、それは悪魔の实の能力者である証明だ。

頭数を集める期間があつたのにも関わらず、ここでは無名。

しかも海の秘宝、悪魔の实の能力者。

偉大グランドライオンなる航路から来たというのはかなり正解に近いと思う。

そしてやっぱりと言うべきか、アタシの考えは正しかった。

「よくわかったわね。ま、わかったところで全く無意味なんだよねえー」

集団の中から一人の女が出てきた。

茶髪をショートボブにして、服装は短いスカートとキャミソールという海賊と言うには不釣り合いな格好の女。

背はアタシよりも少し低いくらいで童顔。

舌を出しながらさっきの台詞を吐いている、所謂「ぶりっ子」ってやつだね。んで、こいつがその違和感の正体。悪魔の实の能力者だ。

「無意味？ わからないねえ、何が無意味なのか」

「あれえー？ 私たちが偉大なる航路グランドラインから来たことを当てたのに、そんなこともわからないのおー？」

「どうせ悪魔の实だろう？ それがどうかしたのかい？」

「あつはー！ それも知ってたんだ！ じゃあもうわかるでしょ？ 私たちは力を蓄えるためにわざわざ最弱の海までやって来たの！ で、おブスさんはその最弱の海のザコ

！ 私グランドラインは偉大なる航路出身のエリートで、しかも悪魔の实の能力者！ これが無意味

じゃなくてなんなのかなあー？」

おブスって……………

まあ、この女はそこそ男受けしそうな顔はしてるけれど、所詮その程度。

アタシは男は当然のことながら、同性の女すら虜にする究極の美貌の持ち主！

アタシがブス？ 結構結構。妬み僻み大いに結構だよ。

誰だってー特に女であれば、アタシの美貌には憧憬と同時に嫉妬を抱いてしまうのは仕方がない。

生物学でもその研究結果は出てる（はず）！

そのくらい大目に見てやろうじゃあないか。

まあ、それに付け加えて言うと。

「アタシは他人を貶す必要すらないからねえ」

「は？ なに言ってるの、おブスさん」

「アタシは美しい。世界でもダントツでだ。だから他人の評価を下げる必要すらく、アタシの美しさに勝てる人間は存在しないのさ！ アタシと美貌で競いあおうってんなら、審査員でも何でも買収しな！ 村度も最良も票操作ですらも、総てを動員したところでアタシには及ばないからさあ!! そうだろう、ボガード!!」

「へい、姐さん!!」

これが真実！ 絶対不変の真理なのさ!!

「バツカみたい。それにあんたブスの癖にムカつくなあー。ブツ殺そう。ちよつとそこのお前、あれを見せてやるわ。やりなさい」

「はい船長」

あの女、船長だったんだ。

手近にいた船員クルーに何やら指示を出している。

すると船員クルーの男はその女船長に向かってカトラスを振り抜いた。

が、刃はその身に食い込まず。

まるで……そう、まるで皮膚の上を滑って刃が逸れていった。

その光景を見た瞬間、アタシは目を見開いた。

まるでずっと会えなかつた想い人が急に目の前に現れたかのような、そんな眼差し。

「キャハハハハ！ 驚いてる驚いてる！ わかる？ 私には今見てもらつた通り斬撃は勿論、打撃も銃弾も効かないの。全ては私の肌を滑ってしまふ。悪魔の実シリーズでも防御に関しては最強の能力！ 私の”スベスベの実”の力の前では誰も私を傷付ける

「ことは出来ないっ!!」

……ああ、ごめんよぶりっ子だなんだの言つて。

この娘、とても良い娘だ。

だってアタシの前に大きすぎる手懸かりを持ってきてくれたんだからねえ。

同じ悪魔の実と、その能力者は同時期に一人しか存在しない。

能力者が死ねば、その能力の悪魔の実は世界のどこかで成る。

……うん、良いぞ。すごく良い流れがアタシに来ている。

この娘が死んでくれれば、どこかでスベスベの実が発生する。

そして発生場所は原作を鑑みるに、この東の海である可能性はかなり現実的だと思う。  
イーストブルー

まあ何れにせよ、スベスベの実はアタシのものだ。

「ボガード、周りのザコは任せるよ」

「へ、ハイ姐さん………姐さん、目が据わってやすよ?」

即座に空を駆け、まだ自慢話をしていた女船長の目の前に着地する。

彼女は驚愕を見せたが、能力を過信してすぎさま余裕の表情を作った。

「すごく速くて驚いたけどおー、私に攻撃は効かないし? なぶり殺しにしちやうよ?」

「まあ、あれだよ。……ありがとう」

「はあ？ おブスさん話通じてるの？ 何が『ありがとう』なのか……」  
「がっはっ!？」

会話の途中で鳩尾に膝を突き入れ、肺の空気を全て出させる。

そして間髪入れずに左手で首を握りしめた。

苦しさと、恐らく初めての出来事で混乱しているのだろう。

彼女はスベスベの能力を手に入れてから、傷が付いたことがないんじゃないの  
だろうか？

本来だったら、蹴られても肌を滑ってダメージにならず、今こうして首を絞める  
こともあり得ない。

スベスベの能力で自身に掛かる摩擦がなくなるのだから、彼女にとってはそれが  
当然だった。

ただまあ、武装色の覇気を纏っただけさ。

それで全てはこともなし。

原作でもルフィはゴムゴムの能力である”打撃無効”を貫通されてダメージを  
受けていた。

ゴムだから打撃が効かない、摩擦が無いから大体の物理は効かない。

同じ悪魔の実なのだから、耐性を貫通して当たり前だろう。

まあ、覇気で負けていたらどうなったのかはわからないけれどね。

「くっ……は、はな……して……っ！」

氣道を絞められ、掠れる声をあげる彼女。

苦し紛れに拳や脚を振り回すが、そんなやけくそじやあ武装色を纏ったアタシの体は傷一つ付かない。

ただまあ、苦しそうなので離してあげようかい。

彼女を左手にぶら下げたまま、月歩ゲッポウで沖合いの海上まで移動する。

アタシが何をしようとしているのか理解して顔をブンブン振りながら、色を真っ青にした彼女。

「お互い海賊旗ジョーローンジャーを掲げたんだ。覚悟はしているはずだろう？」

「おね……が……いい。し、しにたく……ないです」

「ダメだね。アタシは欲しいものがあつて、それはアンタを殺さないと手に入らないのさ。ただそれだけの話さ、これは」

最後に唇だけ「さよなら」と動かして、海へと放り投げた。

悪魔の実の能力者は海に呪われる。

海水に浸かるだけでも力が入らなくなるほどだ。

ここは沖合い。能力者が溺れたら致命的な位置。

確実に、彼女が助かることはないだろうね。

あるとすれば手下たちが助けに来るってところだが……

ボガードくんが千切っては投げ千切っては投げの大活躍。

鉄塊テツカイを崩すことは誰にも出来ていないようだった。

発動中は動けないと言う欠点はあるものの、補って余りある硬度。

銃弾は弾くし、そこまで質の良くないカトラスは刃がポツキリと逝っていた。

なし崩し的に肉弾戦になっていたが、指銃シガン……擬きの速度で放たれる拳で数人纏めて

吹き飛ばしていたり、鉄塊状態テツカイのボガードくんを殴って自分の拳が砕けたり。

うんうん。強くなったねえ。

頼りになる。

さて、なんとと言うか初めての海賊らしい野蛮な戦闘は終わった。

十分過ぎる戦果だろうね。

何よりスペースの能力者がこの世から消えたと言う事実が、とても嬉しく思う。

必ずどこかに実の状態であることが確定したのだ。

彼女に対してはまあ……そんなものだろう。

海賊やつてりやあ、求めるものの前に壁があつた時どうするかつて、そりやあ障害になるようなら排除するに決まつてるさ。

逆にアタシが誰かの障害になることだつてあるけれどね。

その時は甘んじて受け入れよう。

ただ最後の最後まで足掻き続けるがね。

その後、ボガードくんにやられた下つ端たちは彼らの船に縛つて乗せて、そのまま漂流させておいた。

その内海軍が見つけてくれるだろう。

スペースの実際の搜索はまた一からだ。

だけれどもアタシの心は晴れやか。

やつぱり在るのがわかつてるのとわかつてないのじゃあ、モチベーションには影響が出るねえ。

今度はこの島を搜索の第一歩としよう。  
さて、それじゃあいつも通りいこうかね。

「行くよボガード！」

「へい、姐さん！」